

第八節 東京音楽学校を語る

本節は、一 卒業生・教官・関係者によつて語られた東京音楽学校についての思い出、二『同声会報』その他に掲載された文章、三 昭和十七年四月に大学庶務課で発刊した学報特集号の記事により構成される。

馴染んでいました。一軒おいてお隣は幸田露伴の妹、幸田延先生の家で、叔父と一緒に家の前を通つた時、「ここは日本で初めて女性で外国へ行き、音楽の勉強をしてきた偉い人の家だよ」と教えてもらいました。夏の夕暮れ、家の庭に聞こえてくる日本一の女性の奏でる音楽を聴いて、東北の田舎から出てきたばかりの少女期の私の感激は今も懐かしく思い出されます。

私は二学期に脚氣で休学、翌年は家の近くの女子師範学校に転校、音楽学校声楽科出身の大和田愛羅先生にお会いしました。言葉は乱暴でしたが心の温かい先生で、音楽の時間は活気が満ちあふれていました。私は先生から聴きに行つてこいと、音楽学校の校内演奏会の券をいただき、初めて音楽学校の門をくぐりました。まず柳兼さん（旧姓中島、明治三十五年本科声楽部卒）のオルフォイズのアリアをどつしりと深みのあるアルトで歌い上げる美しさに感じ入り、つぎに立松ふささん（旧姓園部、大正二年本科声楽部卒）のロッシーニの《ウナ・ヴォーチェ》、コロラトゥーラの軽やかに自由自在に歌い上げる素晴らしいに全くびっくり仰天しました。何回か校内演奏会を聴かせていただきましたが、竹内うめさんは素晴らしいアルト、樋口信平さん（二人とも大正二年本科声楽部卒）も今でもあんなバスはないと思うほど素晴らしいバスでしたよ。竹内さんは卒業後まもなく亡くなり、樋口さんも大正九年に亡くなつてしまい、本当に惜しいと思います。この他、永井いくさん、長坂好子さんの《フイガロの結婚》などの美しいアリアに魅了されてしまい、どこで楽譜を入れようかと探し回つたりしました。さて大和田先生は「音楽はいいぞおー」としきりにおっしゃるので、ではやつ

加藤テイ（大正三年入学、大正六年三月甲種師範科卒）
まず東京音楽学校入学までのことから始めましょう。私の家は祖父の代からキリスト教で、私は弘前市のミッショナリーズ系の小学校を卒業するとすぐ上京し、小石川表町の叔父の家から、やはりミッショナリーズ系の青山女学院に通うようになりました。ですから賛美歌によく

てみようかという気になりはしたが決めたのは卒業する年の夏休みでしたので準備不足、一年間は芝小学校で教えながらレッスンに通つて受かりました。あんな嬉しかったことなかつたですよ。

受験は大正三年でした。私たちのころは家にオルガンはあつてもピアノがある人は少なかつたので、ピアノ科も声楽科も師範科も入試にピアノはなく、音楽取調掛より発行された『小学唱歌集』の二編と三編の中から当日決められた一曲を歌うことと、新曲がありました。当日黒板に書かれているのを見て歌うのです。コーラルユーブンゲンもありました。奏楽堂裏の小さい部屋で五人ずつ呼ばれて入つて行きました。小学唱歌といつても結構高尚な歌がたくさん入つていました。

ですから入学した時は、ピアノは本科の人も師範科の人もあまり違わなかつたようでした。同期のピアノ科の宇佐美さんと同じ曲を弾き合つて勉強したこと思い出します。

私の先生は久野先生でした。私は入学前二、三年間オルガンを習つていたのでその弾き方の指の癖がとれず、先生を大変困らせ、「あかん！ あかん！」と怒られましたが、先生は根気よく指導して下さいました。ベートーヴェンがとてもお好きで生徒にもよくこの作曲者の曲を下さり、卒業の年にはソナタ三番をみつちりしごかれました。熱心になると関西言葉になり、できないところ気に入らないところはできるまで頑張らせるという実のある教え方でした。お言葉は咄、咄でしたが、いやみのみじんもない先生でした。先生が赤坂見附で事故に遭われたときは神戸先生にレッスンを受けることになりました。雰囲気が違つたように感じましたが、曲が一通り

ざつと弾けるとまずあげて下さるのでその点気が楽でした。久野先生は約半年静養、快復されて後、ベートーヴェン弾きとしてますます有名になられました。大正七年十二月にわが国初めてのベートーヴェン・アーベントで後期五大ソナタからの演奏が評判を呼び、その研鑽が認められて文部省から二年のドイツ留学を命ぜられ、大正十三年四月に日本を出発なさつたのですが、ベートーヴェンゆかりの地バーデンバーデンの宿舎で自殺してしまわれたのです。なぜか？ 噂はさまざまに飛びかいましたが眞の理由はわかりません。大正十四年八月、遺骨となつてお帰りになられたことはほんとうに痛ましく悲しい出来事でした。小石川の傳通院に有名な彫刻家朝倉文夫氏制作の立派なお墓があり、享年四十一歳とありました。

歌は岡野貞一先生で男女一クラスいっせいに教室に入り明治三十四年頃発行された中学唱歌集を生徒も伴奏を弾いたりして、つまり中学校・女学校の教師になつたときすぐに役に立つためのような授業でした。先生の印象はたいへん真面目で私ども女生徒の顔はまともに見て下さらなかつたように覚えております。私は声楽にあこがれていたのでひそかに長坂好子先生について時おりレッスンを受け満足していました。

さて声楽家のペツツォルド先生のことですが、先生のお墓が京都の比叡山にありますので、先生の命日には柳さん、長坂さん、武岡鶴代さん、竹内禎さんなど昔のお弟子さんたちが必ずお墓参りにお出になつていました。今はこの方も亡き人となり、誰もお参りに来られる人はいなくなりました。この先生が日本の声楽界の指導者を育てあげたことを忘れてはならないと思います。私の師大和田

愛羅先生もそのひとりです。私は入学前にステージの先生にお目にかかるつています。柳兼さん、立松ふささんその他私の聴いたすばらしい声楽の方々の伴奏を先生がすべてお弾きになつたのです。背はすらりと高く、ロングドレスにボンネットというか、お帽子をちょつと斜めにかぶり、気品があり、そしてまたその伴奏のすばらしさ。ステージが一幅の絵であり、そこから美しい音楽が湧き出てくるような感激は今も忘れることができません。

ヴァイオリンは安藤先生、とてもきびしく清潔好きとの評判で、生徒もレッスンを受けるときは半襟は汚れない清潔なのをして、袴も寝押しをしてひだをきちんととしてとても気を遣つているようでした。頼母木こま先生は明治三十六年に卒業なさつた方で、調子を外すと「あなた、コールユーブンゲンなすつてるの?」ときびしく言われる。

学科の先生方では、一年生のとき楽典を信時潔先生にお習いし、和声を中田喜直氏のお父上の章先生に。私どもはすぐかつかとなる先生にあだ名をつけて「しちりん」とお呼びしていました。なつかしい昔です。上級生になつてから難しい作曲は島崎赤太郎先生です。見るからにこわい先生でしたのに私ども赤ちゃんとお呼びしていました。英語は乙骨三郎先生。うつかりへたな質問をすると「何ですかそれは」と一種特徴のある口調でにらむので、あの先生の前ではうつかり質問はできんぞ……という感じを抱いていました。国語は吉丸一昌先生で、生徒監でもありました。今に至るまで歌い継がれ、学校の教材にもなつている「早春賦」の歌詞はこの吉丸先生の作で、曲はしちりんの中田章先生、ほんとによい歌を残して下さ

いました。吉丸先生は私の在学中に亡くなられました。吉丸先生のあとへ大須賀績先生が来られましたが、私どもは高野辰之先生に現代の国語を習いました。たいへん学識の豊かな活発な授業で、私はたいへん興味をもつて楽しく受けることができました。音楽史は乙骨先生で、ノートをとるのが忙しい時間でした。他に英語に牛山先生、ドイツ語に富尾木先生という体格の豊かな先生がいらっしゃいました。

次に当時の生徒のことですが、袴で靴を履くのが流行しましたが、これはよそゆきの姿で普通はカシミヤの袴に美しい鼻緒の付いた草履を履いていました。式服は冬は黒の紋付（素材は木綿でも絹でもよい）、夏は少し紫陽花色がかつた明るいグレーのちぢみの紋付で袴はカシミヤの上品な紺というか、藍色という方が良いかも知れませんがよい色でした。

当時上級生はとても威厳をもつていてちょっと変な格好をしているとすぐ怒られました。個人レッスンを受けるときは、身なりに気を遣つて清潔にきちんとする気に配つていたような時代でした。

私たちのときは家にピアノがなかつたり、あつても日本家屋では思うように練習ができる人が多かつたので、寮に入る人がほとんどでした。練習室はひとりひとりの時間割が決められるのでその時間は練習室に行けば誰にも遠慮なくできるのですが、それでも足りないときは、空き巣狙いといつてさぼつている人の部屋を捜し歩いて入り込み、余分に練習することもできました。

寄宿舎は規制が厳しくて、男の人からの手紙は舍監が開封しまし

た。家族や親戚など手紙を貰つてもいい人、会つてもいい人の名前はきちんと保証人から書監宛てに届けておかなくてはならないのです。うつかり男子生徒と上野の山を歩いてもにらまれました。しかし上手に恋愛をした人もいました。学校の中でも同じ郷里から来た人どうしの恋愛もあり、そういうときはばれないよう助け合つたりもしましたが、なかには告げ口で退学になつたかわいそうな人もいました。

宿舎でたびたびお金の紛失事件が起きました。苦心して調べてみると模範であるべき最上級生のわがクラスメイトでした。表沙汰にすれば当然退学ともなりかねない、さてどうしたらよいか本人を除けて十二人ほどのクラスメイトがひそかに集まり相談の結果、「これほど悪いことをして騒がせたのだから黙つて見過ごすわけにはゆかない。みんなの前で本人に、『私がやりました。悪いことをしてすみませんでした』と謝つてもらおう。それが言えたら堪忍してあげて外部には一切もらさず皆一緒に卒業しようじやないか」と一決。ある日奏楽堂の裏に本人を交えて集まり、そしてなかなか言い出せなかつた本人の口からその言葉がやつと聞けたのでした。そのときはみんなとても喜び感激して「よかつたよかつた。それでよかつたのよ。ありがとう！」といって拍手までしました。今はみんな亡き人となつてしまい、心臓がジーンと痛む思いですが、みんないい人ばかりでしたね。みな懐かしい昔の思い出です。

〔昭和五十九年九月、京都市北区の自宅にて。編集部で整理した原稿に加筆訂正
いただいた。〕

村井満壽(旧姓 相澤) (大正五年入学 声楽科、十一年三月
研究科修了)

私たちの頃は入試で副科の試験がなく、声楽科はピアノが弾けなくとも入れました。私など札幌でしたから、せいぜい自分が通っていた府立札幌高等女学校の先生に習うくらいで、月謝を払つて受験の勉強をした覚えはありません。コールユーブンゲンを買ってもらったのと、贊美歌集を持つていましたけど、それだけでしたよ。

だから入つてからが大変。私は萩原英一先生に習いましたが、周りにはバイエルなど弾いている人はもういないのに、私はそれすら弾いていませんでした。

寮に入つてましたから、学校のピアノを借りるんですよ。六時に鐘が鳴ると、みんな練習室に飛んで行き、一部屋を六時から九時までの三時間、二人で使います。初めのうちはみんな熱心でしたが、だんだん怠けて、あまり人が行かなくなることがあるわけですよ。そうなると「空巣」といつつ空いている部屋を捜し歩いて、うまくいけば三時間練習できるんですよ。

師範科は地方の人が多くつたですね。ピアノも歌も、それほど専門的でなくていいけれど、両方必要だったんです。乙種師範科というものが流行り、一年で出て、東北や北海道にたくさん教えに行きました。それほど先生が足りなかつたんでしょう。

仮入学という制度があつて、私のクラスでも声楽で本入学に通つたのは、私と吉原規さんという男の方と一人つきりでした。あとの人は夏休みのあとまで仮入学のまま。秋になると、仮の人はもういつも試験がありました。だから発表の日なんて大変。寮で御飯を

食べても、「出たあー」っていうと飛んで行くんです。私も、

自分が予科を出るときの発表は食事の最中でしたから、帰つてみたら、お茶碗とお箸がどこに行つたんだかわからないみたいになつていてね。どこかに置きっぱなしにして飛んで行つたんでしょうね。

オーケストラの指揮とコーラスは、クローン先生でした。今思うと、ずいぶんこわい先生でしたね。男の生徒のレッスンのときなんか、怒つてグランドピアノの下を追つかけ回したっていう話もあります。ピアノの萩原先生は留学経験があり、ドイツ語もおできになりました。それで、クローン先生が怒り出すと、ドイツ語になつたので、誰もわからなくて萩原先生が呼ばれる。通訳付きで怒られるわけですよ。クローン先生はドイツの新しいコーラスをいろいろ日本へ持つていらしたんですね。

オーケストラは毎週水曜日に練習してましたねえ。今でも忘れられません。なにしろ洋服を着ている人などいないんですから。安藤先生や鳥居つな先生、頬母木こま先生なんかがいらした。管はたいてい、軍楽隊の人でした。それでもだんだん中の人でやることになりました。萩原先生も管を吹くようになりました。でも音が出なくて、みんなで笑いましたね。そうするとやつぱりクローン先生が怒るですよ。いつも私たちを怒つてる先生が怒られるんで、もう嬉しくてね。あの頃の管楽器なんて大したものでしたよ。音が出るか出ないかわからぬくらいでしたから。

クローン先生はベートーヴェンの日本初演をずいぶんなさいましたが、とにかく、何でもテンポがゆっくりだつたような気がしますね。でもそれしかないんだから比較の仕様もなくて、いいなあつて

思つて聴いていたわけですよ。

歌はペツォルド先生に習いました。オペラ・シンガードいらしから、レッスンではアリアをいろいろ歌わせて下さり、あとはドイツ・リートをいくらか。ドイツのほうへ固まつていたようでイタリー歌曲は学生時代には全然歌つたことがありません。

ペツォルド先生はピアノもとつてもお上手で、リストのお弟子さんということでした。クローン先生とウエルクマイスター先生とトリオをなさいましたよ。体格のいい先生でしたから、初めて習うとき、私などあまり小さいもので「おまえ十四か」って言われました。

(昭和五十八年四月札幌市内の自宅にて。聞き手 森節・後藤暢子)

淺野千鶴子（大正九年入学 声楽）

いちばん覚えているのは、コーラスの授業につくときのことですね。クロイツァー、プリンシスハイムといった指揮者の前に、声楽の上級生から順に並びました。専門の人が前で、器楽の人は後ろで練習していました。オーケストラも学校の生徒だけでは編成できず、先生方がずいぶん入つていきました。幡田琴次も部員になつてヴァイオリンを弾いていましたよ。管楽器にはずいぶん、軍楽隊の人のが入つていましたね。

予科一年のときは船橋榮吉先生でした。ピアノ科は予科一年でもピアノのレッスンがあるけど、歌はみんな一緒にコーラルユーブング。それが今のソルフェージュですね。本科一年から長坂好子先生、岡部さんの先生ですが、おつかなくてね。あとはネットケーレー

ヴエ、それから研究科でマリア・トルさん。外人の先生は二人ともドイツ人。それでどうしてもイタリアへ行きたくてね。昭和十二年から十五年にかけて留学しました。

助教授の資格で文部省留学させてもらいました。私の前は田中宜子〔田中伸枝（旧姓 渡辺宣子）〕さん、その前が船橋先生でしょう。私で最後でした。文部省から毎月三六〇円送つてくれて、三年目は自費で生活しました。

ヨーロッパから帰り戦争も済んでからドビュッシャーを歌つたんです。フランス歌曲を最初に歌つたのは太田〔太郎〕先生の奥さんになった荻野綾子さんです。荻野さんが結婚前に深尾須磨子さんと一緒にフランスで勉強していらして、学校の土曜演奏会でドビュッシャーをお歌いになりました。私はそれを聴いて感激したんですねえ。ドビュッシャーの何の歌かもわからなかつたし、フランス語のフの字も知らなかつたんですけれども。それ以来、フランスの歌つていいなあ、いいなあつて思うようになつたんですね。むこうへ行くことが決まつたとき、やりたいものはフランスの歌でしたが、発声はイタリーで学ぶものだと思っていましたから、まずイタリーへ行きました。それでリコルディを訪ね、ドビュッシャーの楽譜を集め、自分で少しづつ勉強して、戦争が終わつたときにリサイタルをしたわけです。そうしたら、いつの間に勉強したんだろうって言われましたよ。

（昭和六十一年三月。聞き手 服部幸三）

半世紀以上も前の出来事を思ひ出しながら申し上げるので間違つてゐるところもあるうかと思ひますがその点お許し下さいませ。父の仕事の関係で台湾で育ち台北第一高女を卒業と同時に東京音楽学校受験の目的で上京いたしました。大正十年三月（一九二一）のことです。当時神田錦町にあつた山田源一郎先生の女子音楽学校普通科に入学しその寄宿舎にも入れていただきました。名前は女子校でも男性の生徒もたくさん来ており大多数の方は音楽学校の受験準備生で私もその一人でした。

先生方は大部分が上野出でした。学校から道路一つへだてた向いに電機学校の夜学の校舎があり明々とあかるい教室が手にとるように見えました。

そこの授業を受けている生徒たちの真剣な態度に私たち寄宿生はとても心をうたれました。明くる大正十一年（一九二二）あこがれの音校の受験となり田舎者の私には受験生は皆自信たっぷりに見えました。最後まで残りましたが発表には私の四四の番号はいくど直してもとうとうありませんでした。それから受験対策をかえ、板橋駅近くにある叔父の家の庭の片隅をかり、父が小さい家を建ててくれ、そこから一つ橋大学横、共立裏にある音校の分教場に通うことになりました。

声楽は立松ふさ子先生、ピアノは女子音楽の時の西先生のお宅に伺うことにいたしました。間もなく立松先生のお宅にも伺うことになりましたが、いつの間にか省線と言われるようになりました。さて明けて大正十二年（一九二三）三月一回目の試験を受けることになり

ました。今度駄目だつたらもう受けさせてはもらえないで毎回毎回発表を見に行くあのおたまやのとおりを地獄に行く思ひでとおりました。おかげさまで最後まで残りましたがその四十三人の中から十三人は落ち三十人しかとらないといふことでしたので、またまた発表までの心配なこと。私が昨年落ちた時入学された尾田多鶴さんという方からおめでとうといふ電話がありましたのはその日四月のはじめ四時頃でした。どうしても自分の眼でみたいので当時中学生

だつた弟（現在の埴谷雄高）と一緒にみぞれまじりの路を急ぎました。ほんとに三十の数しかありませんでした。せつかくここまで受かった方たちだつたのに十三人の方はほんとに気の毒でした。十三人の中の一人で女高師で余興に三味線をひいたとかで放校になつたという方も駄目のようでした。

当時合格番号については一つのジンクスがあり、誰彼いうともなく一番の者は必ず受かるといふことでした。はたして一番の方は合格されておりました。さてせっかく入学を許されてもそれは仮入学であり一学期末の試験に合格しなければ不合格になつてしまふのでした。やがてこの本試験に合格した者だけが奏楽堂に集められ毛筆で姓名を書き晴れて東京音楽学校の生徒になれたのです。

三十名の内訳は男子十人の内バイオリン五人チエロ二人ピアノ一人声楽一人オルガン一人。女子二十人の内ピアノ十二人声楽六人バイオリン二人でした。

当時男性と女性と一緒に学校はこの東京音楽学校だけでした。

といって男も女もゴチャゴチャいるというワケではない、校門をはいれば男生徒は右前方の控室に、女生徒は左に曲り校舎のうしろ

にある控室にというふうに授業以外は学校ではいつしょになることはありませんでした。

服装は男子は黒の学生服で演奏会の時も同じでした。女子は着物にお納戸色の袴・演奏会の時、冬は黒の五つ紋付にお納戸色の袴、夏はねずみ色の五つ紋付にお納戸色の袴でした。いつの間にか女生徒は袴の紐に樂の字を丸で囲んだ七宝焼の小さいバッチをつけるようになりました。

生徒は先生方にアダ名をつけるのが上手でした。生徒主事の木内先生はメザシ、ドイツ語の田村寛貞先生はタムカン、作曲の弘田龍太郎先生はヒロリュ、なお寄宿舎の舍監の先生はプレストと言っていました。ほんとのお名前はぞんじません。食堂これは別棟に名ばかりのとても小さい粗末な建物でキンカメさんと皆が言つていました。なりの小さい身体に白い仕事着を着た男の人がいました。私は一度もこの食堂にはいったことはありませんでしたが何でもオムレツが十五銭、ライスカレーが二十銭とかでした。

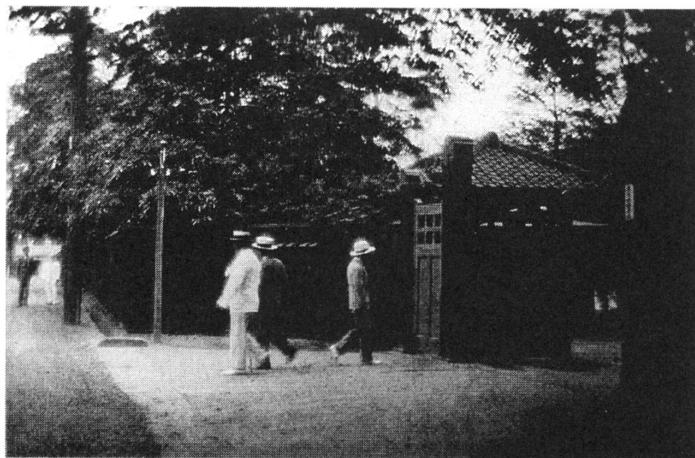
音楽会。当時学校のオーケストラとしてはこの音校が一番でした。ちょっと珍しい光景はこの会の演奏練習には必ず海軍さんが隊を組んで隊長の方につれられキチンと歩いて来られオーケストラに加わるのでした。その頃学校には管楽器の科がありませんでしたので、海軍の軍楽隊の方をお借りしていたワケです。学校の演奏会はだいたい秋に一度で、あと土曜演奏会が年に二度位だったと思います。こちらはおもに生徒の演奏でした。それからよくこの学校を参観に来られるおもに学校の生徒の方などでしたが、その時は上級生の男の方がいきなり出演者をきめましたのでそのままのナリで弾い

たりうたつたりしたもので。これを参観演奏と言つていました。

学校の演奏会で忘れられないのはベートーベンの第九が演奏された時のことです。とても前評判で第九を知らない人までどうして

音楽学校では「大工」の音楽なんかやるのだろうといつたぐあいに第九を知らない人まで第九をやることは知つていました。ちょうど

その当日ドイツのバイオリニストで有名なジンバリスツが来日中で演奏会に来られました。何とか人々はりきつてやりましたのに終り近くバイオリンがまだタクトがふられない時に出てしまったので歌をうたうものかどうするのか、歌う者も歌はない者もあり、タク



昭和初期の東京音楽学校正門

ト棒は譜面台にたたきつけられ何とも言えない最高に困った瞬間でした。いまだにあの時の光景ははつきり眼にうつり忘れられません。困った大事件はもう一つありました。それは大正十二年九月一日の関東大震災です。

せつからく七月に入学できたのに九月一日ですか。シタチ下町方面からのがれて來た人

は今、料理屋「花だん」が焼けていたから今頃は音楽学校へんが焼けているでしようとか、何日かたつと、もう音楽学校なんかなくなりますよとか、いろんなデマが飛びかいました。

でも学校はチャンとあり、何一つ荒らされた所もなく十一月一日から二学期ははじまりました。

学校の音楽会で最も重要な会は卒業式のあとに行なわれる卒業演奏で、成績優秀な方だけが出られる会でした。これに出られたか出られなかつたかでいちおう社会に出てからの地位が自ずから決まるという時代でした。

卒業後七、八年たつた昭和十年十二月末、母校である台湾の台北第一高女につとめるようになり渡台いたしました。当時音楽の先生方はほとんど上野出の方ばかりと申しても過言ではないくらい同窓の方がたくさんおられました。古くは横田三郎・赤尾寅吉・大島今子・一條眞三郎・大正時代になつて法水季子・小川研一・大西安世・昭和になつて鹽原八重・三浦とみ子・久野やす子・石田良男・木村初代・池田季文・岩田泉・清野健。以上の先生方は皆台北在住の方々ばかりで、全島ではもつとおられたと思ひます。在校中はそれぞれ科がわかれていいたためにあまり交流はありませんでしたが、こうして一つ所で同じ仕事をしておりますと大そう仲よくなりお互に連絡しあつて誠になごやかなものでございました。よく内地（終戦まで日本のこと内地と言いました）から演奏に来られてもききにゆく者の耳はなかなかでなどり難い者が多く、下手なことは決してできませんでした。私がつとめておりました学校もとてもレベルが高くこうしたことは先生方がいかに高度なものをお教え下さつてい

たか、それはひとえに母校東京音楽学校にお世話をなつたおかげで誠にありがとうございました。台湾も今は外つ国、人生は何と思いもかけないことになります。終りに東京芸術大学のますますのご発展と先生方のご健康を心よりお祈り申し上げ筆を止めます。

〔平成八年一月、編集委員会の依頼により執筆〕

大井悌四郎（昭和二年四月入学 六年三月本科卒 ピアノ、

八年三月研究科修了）

昭和二年四月に入学してまもなく、忘れられない出来事が二つありました。ひとつは同級生で退学者が出たことです。

入学して七月の本入学試験では仮入学です。だいたい一年男が十人、女が二十人ですが、男一人、女一人が七月まで退学になりました。男の方は毎日の練習がきびしいので、四年間こういう生活はやつていけないということでした。試験はパスしましたが、自分で辞めてしまつたんです。

もう一人の女のは声楽の人でしたが、三越のデパートで偶然、男の上級生に会つて、その上級生を食堂に呼んでご馳走したのがわかり、それは出過ぎだというので七月いっぱいで退学ということになりました。ご馳走になつた男の人も、すぐにではなかつたけれども、一年ぐらいたつて退きました。辞めさせられたか、自分から辞めたかわかりませんが。

もう一つは校長排斥問題です。七月、本入学が決まつた頃、最上級生に、秋になつたら学校で一騒動あると聞かされました。村上校

長を排斥するんだというわけです。私はその先輩に申しました。「村上校長には入学式のとき一回会つただけだ。十一時頃になると門をくぐつて見えて、校長室に入られる。二時頃にはお帰りになる。これだけでは排斥する理由がわからない」と。そうしたら「それが問題だ」と。村上先生は学者として名をのこされた立派な方です。しかし学生たちは、もつと学校に情熱を傾けてくれる人、音楽に熱心な人に校長になつてほしかつたわけです。第九の初演のとき門の外まで行列ができ、三回演奏しました。そのことで非難や再演希望の投書が新聞に殺到したのを無視したことと排斥の原因でした。

昭和二年の九月になって、本科と予科の男子の全生徒が銀座の東仲通りにある山田耕筰先生のオーケストラの事務所に伺いました。つまり、私たちはこのように団結しましたから以後よろしく、と言ひに行つたわけです。そのとき山田先生が、言うことを聞かなければ指を折られるかもしれないからそのつもりで、とおっしゃつたのを覚えています。その後何度も芝の労働会館に集まりました。五十人位入る部屋があつて、山田先生は必ず来ておられました。結局、十月末頃、校長が交替しました。ただし公式の記録では翌三年三月と四月の変わり目ということになっていますが。騒動は新聞にも書かれました。

高折〔宮次〕先生は、日本のピアノ演奏を語るときには欠くことができない方です。レッスンはきびしかつたですよ。ご自分の生徒を正月中に一度必ずご自分の家に呼んでご馳走して下さるので帰りに生徒は、「先生、明日からはひとつお手柔らかに願います」と言

うんですが、お正月が済むと相変わらずきびしいレッスンが始まるんです。

当時はレッスンが予科は週三回、本科でも週二回ありましたから、外へ教えに行く暇などありませんでした。アルバイトをしている人もあるいはいたのかもしれません、聞いたことはあります。

奏楽堂では昭和二年頃からレコードイングが始まり『マカベウスのユダ』や『十字架上の七つの言葉』などがコロムビア・レコードに吹き込まれています。そのような場合には私たちピアノ科の生徒もみんな歌わされました。『君が代』もラウトルップ先生の指揮で歌いました。当時はまだ録音機がありませんでしたが、昭和十年に初めて学校に録音機が購入され、そのとき初めて上野児童学園のピアノを録音したんですね。それが学校備え付けの録音機で録った最初だと思います。自分で言うのも口はばつたんですが、私が入っているんです。この写真がそうです。私と昭和十八、九年まで教えていた児童学園の生徒が写っています。曲はハイドンの二長調のピアノ協奏曲の終楽章です。オーケストラの代わりを私が弾いて、二台のピアノで演奏しているわけです。

昭和五年に、木更津に演奏旅行に行きました。そしたらあちこちに薬の広告がありましてね。木内喜右衛門と書いてありましたが、それは私たちの倫理の先生の名前だつたんです。気の利いた人がそのポスター一枚剥がしてきて、倫理学の時間に黒板に貼りました。そしたら木内先生が入っていらして鷹のような鋭い目でジロツとご覧になり、それから意外にもニコニコなさつて、千葉県には木

内喜右衛門という人がたくさんいるんだとおっしゃるんです。木内先生は生徒監で怖がられていましたが、それ以来、印象が変わり親しみを感じるようになりました。

卒業前、試験も済んでぶらぶらしていましたが、ある日国語の先生に急に呼ばれて、今年は大井君が卒業式で答辞を読むことになつたから、原稿ができたら持つてくるようにと言われました。一、三回持つて行つては直されましたが、その時に、あの木内先生のことを伺いました。喜右衛門先生は実は私たちの卒業と同時にお辞めになりましたが、それは、四年前の校長排斥運動の責任をお取りになつたからだそうです。

研究科を終わつた時、ちょうど福井先生がベルリンに行つておられ、井口基成さんもパリへ行かれて留守で男の先生が少なかつた。しかし男を教えるのは男と決まっていたらしく、しばらく非常勤講師のような形で残つていきました。ただ、学校もだんだん文部省の言うなりになつて、校庭はカボチャ畑になり、ニワトリを飼うようになつていきました。学校に残つていた先生も——後に札幌に落ちつかれた遠藤宏先生もそうですが——多くは戦争責任で辞めることになりました。

(昭和五十八年三月 帯広市双葉幼稚園にて。聞き手 森節・後藤暢子)

水谷達夫(昭和四年入学 ピアノ)

四十五年もいたのだから、いろんなことが多くて何を話したらよい。とにかく、教授になつたり、講師になつたり、また、教授になつたり、出たり入つたりの歴史ですから、音楽学校の先生として

は異端者だった。昔は偉い先生たちも年をとると、教授をやめて講師になるという制度があつたので、私などは若くして教授にされ、学校の運営面でずいぶん使われたものです。

——当時の日本の状況や音楽界のようすなどいかがでしたか。

良き時代だったね。社会に出てからも何でもやれる時代でしたから入る前から希望はもてたし、勉強さえしていれば卒業しても何かができる、という時代でした。世の中での音乐会もそんなにはなくて、音楽学校の奏楽堂で行なわれる学友会の演奏会は大きな存在でした。定期演奏会は上流社会の人たちの社交場のようになっていたし、学友会の演奏会も入場券を回数券のようにして売つたし、それもほとんど売り切れるほどでした。

——私たちが入学した昭和十七年頃でもいつも満員で、生徒は入ることができず裏やそでなどでかろうじてきくだけでした。

オーケストラとしても山田耕作さんや、近衛〔秀麿〕さんがはじめた新交響楽団がどうにかやつてあるぐらいで、音楽学校のオーケストラも貴重な存在だったようです。ソリストとしても井上園子、原智恵子、甲斐みや子などという若手三羽鳥が出てきたり、巖本真理さんが天才少女としてデビューした頃ですから。音楽は商品としての価値にはならず、優雅に芸術だけをやっていればいいという時代でした。受験生を教えての生活ということはなかつたし、たまに面倒をみてもよい生徒であればトコトン教えてレッスン代などはどうなかつた。

——私などは月にまとめてもつてゆくと、そのお金でご馳走になつたりしたものですね。

大掃除などあると生徒たちが皆で手伝いにきてくれて、ずいぶん助かつたものだが、でもあとが大変で、職人さんを頼んだ方が安上がりでしたよ。皆に一杯のませたり、寿司をとつたりで結果としてはもの入りでしたが、親しみは大変なものでした。

——先生の頃の学校でのレッスンはどのようにやつておられましたか。私たちの頃でも週二回ありましたが。

そう、週に二回ありました。月、木より、月、金に組んでもらうのが有効でしたね。月曜にレッスンがあつて次が木曜だと、火、水が忙しくて間に合わない。三日間の余裕があると金曜にしつかりやれたらし、次は土、日と二日間を朝から十分練習ができ、月曜にヨーレッスンが受けられたということです、土、日など遊んだことはなかつたね。とにかく、学校時代はよく勉強しましたよ。今の学生たちとはずいぶん考え方が違つていました。それもよき時代だったからかな。

——学科の授業も少なかつたし、時間はタップリありましたね。ピアノ科の人たちなどは、学科の授業が終わるとサッと帰ってしまい、家で勉強していたようで、学校でワイワイやつていたのはわれわれだけだったようです。卒業の頃までピアノの人は名前と顔が一致しないくらい違うこともありませんでした。ところでこの学校の先生になられたのはいつからですか。

これは早かつたね。研究科の時に児童学園を教えるようになり、卒業と同時に分教場の先生になり昭和十四年十月に助教授になりました。そして十九年には教授になつちやつた。永井〔進〕、豊増〔昇〕の二人も一緒でした。これは変な話だけどその一年前に席が

あいていたのは一つしかなく、誰をするにしても具合が悪いということで、黒澤愛子さんがまず教授になり、次の年に男三人と一緒になつたという話でした。その頃は男の生徒しかつけてくれなかつたのですよ。なぜかというと自身の先生は女生徒をもつてはいけないという規則があつたというのです。だから助教授になる前に結婚しろ、というわけで三人とも大急ぎで結婚させられたというようなことでした。あの頃は誰々門下生といいう方は、外側の人たちがいつていたことで、中では交替でレッスンをしていたので誰が弟子だか決められなかつた。入る時と入つてからと、上級生の頃と研究科の時と先生はいろいろな人がやつっていましたので、誰々門下といわれたのは卒業の時についていた先生を呼んでいたようです。レオ・シロタとレオニード・クロイツァーの二人の外人教師がいたので、それには最上級生をまわしていました。私のところからもずいぶんまわしたものです。当時はピアノ、ヴァイオリン、チェロ、声楽、指揮と多くの外人教師が来ていましたね。

——先生は御前演奏をされた、という記録がありますが、それについてお話し下さい。

あれはたしか、昭和九年頃だつたと思います。私が研究科にいた頃だつたから。これについておもしろい話があつてね、実は学校を出た時に演奏会は燕尾服だというのでまず燕尾を作つておいたのだけど、御前演奏はモーニングでやらなければならぬ、ということであわててしましました。永井君や豊増君は金持ちだつたから、すぐモーニングを作つたわけ、私のところはそうはゆかないでので、貸衣装屋でもいつて借りようか、などと思つていたら音楽史の太田

太郎先生が、自分のを貸してやるからそれを着ろという。前の日に借りて当日それで演奏したわけです。後で写真を見たら、二人はピシツときまつたスタイルなのに、私だけがダブダブのモーニングでどうも格好がつかなかつたという思い出があります。また、演奏の前後や演奏の間でも頭を上げるな、陛下の方を見るなということと、幕の上がる前から下を向いていて、演奏中は横を向いていることと、鍵盤ばかり見ていて、終わつてからもおじぎをしても頭を上げるわけにゆかず、結局、何も見えなかつた。

——演奏はいかがでしたか。緊張されましたか。

それはそれは大変なものでした。当時のことですから、もう緊張のきわみでした。乗杉校長はよく演奏会に宮様を呼んでこられましたね。学校のベンキがはげてきたり、庭が悪くなつてると宮様を招待されるんです。そうするとすぐきれいになつたものです。谷中の警察署の方も喜んでいました。警備に出動するとなにがしかの手当が出たものだから、非番でも何でも皆、学校に来ていました。われわれも何かというとよく狩り出されたものです。当時としては男がピアノを弾くなどというのは珍しかつたのでしょうか。われわれの上は井口基成君一人だつたから。下は金子登君とか山田和男君などがいましたが、われわれ三人もいたのでピアノではやつてゆけないといふんで二人とも指揮者になつてしまい、結果としては彼らの棒でわれわれが演奏するということになつてしましました。井口君もわれわれ三人が追いかけていつたような状態だから、負けじと頑張つたようで、どんどん新しい曲に取り組んだり、演奏会を開いたりよくやりましたよ。だからあれだけの存在のピアニストになつたの

でしょう。

—十六年からはじまつた大東亜戦争の最中はいかがでしたか。私たち十七年に入学してからすぐ、慰問演奏ばかりで学校の授業はほとんどなく、十八年には軍隊に入つてしましましたし、残つた人たち、特に女の生徒たちは動員されて軍需工場などで働いていたようですが。

私たちはその工場へ動員された生徒たちの責任者としてついて行きました。それで思いついたことは、なぜ、われわれをはやく教授にしたかということでした。動員隊長としてゆくためだつたのでしよう。年をとられた先生たちでは困るし、立場が下だと工場長との間での問題があり、隊長は教授でなければ対等にできない、だから若い人を教授にして隊長として派遣すれば、ということでわれわれを早く上に上げ、隊長として出したようです。だから十八年後半から終戦まではずっと工場巡りでした。鐘ヶ淵や東芝、東京計器といふような軍需工場へ、音楽学校の女生徒を連れて行つていきました。終戦は富士の凸版印刷で迎えその処理で大変でした。もう一つの思い出としては出征する男の生徒たちの壮行演奏会でよく歌の伴奏したことです。これから軍隊へ行くので最後の記念に先生の伴奏で歌いたい、というからずいぶん多くの人たちの伴奏をしたものでした。私が工場へ行かない時はいつもやつていました。楽屋では死ぬなよ、といつていたものでした。

それから音楽学校の木造の校舎は私たちが火を消したんですよ。ここにも焼夷弾が落ちたし、よその火の紛が飛んできたので一生懸命夢中になつて消したものでした。東京大空襲の時、下谷がやられた

夜などすごいものでした。今考えるとよく焼けなかつたものだと改めて思いますね。十六年頃から校庭の隅に大きな防空壕を作り空襲警報が鳴ると重要書類を運んだりしたけれど、私は一度も入らなかつた。どこにいてもやられる時は同じだし、壕の中でやられるよりは広いところの方がいいと、見張りと称して入りませんでした。でもよく助かつたものですよ。

—戦後はいかがでしたか。

戦後の学校は先生がほとんどいなかつた。兵隊に行つた連中は二十年の内にはあまり帰つて来ていなかつたし、帰つて来た連中もまだ学校に出てくるという状態ではなかつたようです。二十年には入学試験はやらずに面接みたいなことで入れ、二十一年もまとまにはやらなかつたと思います。正式な入学試験は二十二年からだと記憶しています。

—奏楽堂についての思い出としては何がありますか。

やはり出征する生徒の壮行演奏会ですね。音楽学校からも特攻隊に行つた人もたくさんいましたが、その中で私の生徒だつた者がいて、帰つて来た人はいいけれどそのまま死んでしまつた者もいるわけで、そのことが奏楽堂の思い出の中に一番占めていますね。

—先生の頃も入学後の宣誓式はありましたか。

あつた、あつた。ステージに先生がズラッと並んでいて、その前で署名させられた、あれでしよう。前人の字を見ると皆、ふるえてミニマズがのたくつたようになつていて、自分も同じになつてしまつたということですね。

—ずいぶん古くからやつていたのですね。

おかしな行事でしてね、私は本科の時と研究科の時と二度書かされたね。私はね、在校中に始末書というのをたくさん書かされた記憶があります。何かとすると始末書でしたもの。

——どうしてですか。私も結構書かされた思い出がありますが。

クラスの総代だったものだから、事があるたびにクラスの責任者としても書かされたのです。また、何かにつけ先生や学校の命令に逆らつたので、学校からはにらまれていたのかもしれません。私自身は特に悪いことはやらなかつたけれど、クラスの皆でやつたり、どうしても納得できない命令などにはよく反抗したので連帶責任をとらされ、クラス総代として書いたものです。

——終戦後、大学になるまでのいろいろなきさつがあつたようですが、よろしかつたらお話しください。

東京音楽学校から東京芸術大学音楽学部へと移行する時は、音楽学校も残り新制大学としての発足と両方がダブツした時期があり、この時はいやな空氣でしたね。先生としては大学の先生と音楽学校の先生とが同居しているわけですから、お互いに気まずい思いをしていました。片や大学の先生、片や音楽学校の先生と人事院の辞令がきて決まるわけで、学内での人事はどうにもできず、特に私などは当時の先生の中では一番若いのに真っ先に辞令が来たのですから、古い先生方にイヤな眼で見られているような気がして具合の悪い思いをしました。でも完全に大学となつた時点ですべて解決しました。

——私たちは終戦後、アメリカ軍の仕事をたくさんやつて助かりましたが、先生も何かなさいましたか。

教会のミサのためにコーラスを作り、ファイナンス・ビルや築地の聖路加病院の教会へ行つて歌つたものです。声楽の萩谷納君や石津憲一君などに声をかけて朝のミサを歌いに行きました。

——それは私も手伝わせてもらいました。ミサが終わつてから朝食が出るのですが、終戦直後の物のない時でしたから、あの白いパンや砂糖などが貴重品のように思えました。

アメリカ軍と何か接点がほしいと思つていたところに、その話があつたのですぐやりました。歌を歌つて、何か食べられ、お小遣いまでもらえたのだからよかつたと思います。でも私は裏の方の交渉などをやるだけで、おいしいものにはありつけませんでした。

——終戦直後では進駐してきたアメリカ軍、われわれは進駐軍といつていきましたが、そのアメリカの兵隊たちが何かの形で音楽を要求していたので、ほとんどの音楽家は仕事がありました。私たちは管の仲間たちでジャズバンドを組んでキャンプ巡りをやり、中にはそのままジャズプレーヤーになつて今日まで来ている人もいますし、私も朝鮮動乱のあつた二十五年までよく演奏に行つたものでした。

その辺を境い目として戦後の教育は大きく変化してきたのです。が、私たちの入学した頃は今の人たちには想像もできないほどのレヴェルでした。大先輩の萩原英一先生、高折宮次先生方が、何もないようなところに道を作れるように切り開いてこられ、われわれの時代にどうやら砂利を敷いたり、簡易舗装をしたりといふようなどころまでもつてきたし、先生方は自分の後継者を養成することに力をそそいできました。そして後の者は先輩の気持ちをくみとつて、先輩の開いた道をよくするために努力してきたようなわけです。現

代の人たちはその道を狭いだの、よくないだの文句ばかり、そして自分たちの面倒をみてもらうのが当然のように思つてゐる。淋しい時代になつたものですね。それにつけてもあの当時の校長だつた乗杉先生は偉大な人だつたと思います。音楽学校を大きくするという気持ちからか、校舎を増やし、楽器も増やし立派なものにしました。大きな志をもつた人だつたと思ひます。新しいところで新しい何かをやろうという氣概をもつて事に當たつてこられたのでしょ。無事に任期を過ごすというのではなく、敵を作つてでも何かを作り出し発展させていくというやり方でした。教育者、学者というよりは、行政官であり管理者としての最たる人で、われわれはその頃はよくわからなかつたけれど、後になつて考えてみれば音楽学校としての基礎をガツチリ固めて下さつていわけです。

——あの頃の生徒さんたちは自分の将来についてはどのように考えていたのでしょうか。

卒業してからどうしようかなどは考へていなかつたようですよ。何とかなるだろう、とにかく一生懸命に勉強していればどうにかなるというようでした。師範科の人たちは必ずどこかの学校に奉職でましたし、本科を出てからも研究科に残つてまだ勉強を続けたし、そのうちに何か行き先が決まつてきたので、勉強だけやつていました。私などは師範科を出て地方の学校の先生になつた人たちに頼まれてよく演奏にゆきました。永井君や豊増君には東京で演奏活動するようにし、私はもつぱら地方回りをやつしていました。とにかく、どこへ行つても音楽を聴く人を増やし、音楽をやる人を増やしたいという気持ちで出かけていました。

——外国へのご留学についてお伺いしたいのですが。

それについてですが、私は十年損したと思つていてました。ちょうど、一番張り切つていた時が戦争中でどこへも出られず、終戦になつてもなかなか出られず、また、学校の変化などでそのチャンスも得られず、結局のところ十年間遅れてしましました。そろそろ四十代に入ろうという時に出かけたのですが、学校はもう少し待てといふ、でもこれ以上待つていると歳をとつてしまふのでどうしても今でなければと自費で行きました。ご存知のように音楽学校時代からずうつと、先生を呼ぶのにドイツ系が多く、声楽にイタリア系の人々がいました。芸大になってからはフランス系も入れなければといふので、声楽に福澤アクリヴィさん、作曲に池内〔友次郎〕さん、ピアノに安川〔加壽子〕さんとそれぞれ先生になつてもらい、幅のある教育をすることにしたのです。その後、私は学校を辞めて一年ちょっと行つて来ました。帰つて来てからしばらく家にいたのですが、芸大の当時の上野学長から是非にということで戻りました。九月に久し振りの試験に出でビックリしました。その音の悪さに驚いて、安川さんにこんなに音がきたくなくなつたかときいたら、前と少しも変わっていないといわれ、自分の耳を疑つたね。わずか一年少々だつたけれどあちらの音の中にいたら、その音の違いを感じさせられました。でも、三ヶ月もたつたら馴れてしまい、耳というものは大変なものだとしみじみ感じました。良い音を知ることが大切です。今の学生さんはいつでも行けるしいつでも外来の一流の音を聞くチャンスがもてます。しかし、今の学生さんたちはあまり芸術についての議論をやらないみたいですね。時々、キャッスルに行

くとあそこで話が耳に入るけれど、音楽の話が聞こえてきません。私たちの頃はとにかく、皆で議論し、その中からだんだんに音楽というものははとか、芸術というものは、などという何かをつかんだものでした。今の人たちはもつと自分をさらけ出してお互に話し合って何かをつかむようにはすればよいと思いますね。

ところで私は、昔から受験生をいつさい教えていません。ドイツへ行つて先生たちを見ていると誰も受験生を教えてはいないのです。外の先生たちが教えた者を学校に入れて自分が教える。これが本当の姿だと思いました。それで今まで実行してきたのです。昔は外でキチンと教えられる人が少なかつたので、やむをえず音楽学校の先生たちが教えてやらなくてはいけなかった。でも、学校で教えた人たちが世の中に出で今度は自分が生徒をしつかり教えて音楽学校に入れるようにすればいいので、学校の先生は人を作るべきなのです。だから教授法という授業を作つて、しっかりと教えられる人を養成してきたのです。その人が作つた生徒を私たちがもつと高度なものに導く、これがわれわれの任務だと思つています。

——入試の方法は前と今とでは違うのでしょうか。

はじめの頃は点数制でしたが、クロイツァーさんが来てからドイツの方式を取り入れたことがありました。いわゆる入れるか入れないか、というやり方。何人かの演奏を聞いてからどの生徒がよいか、間違いなく弾いても内容がよくなれば入れないと、少々のミスがあつても音楽的によい子は入れようとか、皆で話し合つて決めるという方式をやつたのですが、教務の方から点が出なければ困るとクレームがついて一時は混乱しました。クロイツァーさんは

受験生はまだ何もできていない素人ではないか、だから今少々のミスや忘れたりするのは当たり前のことで、卒業して一人前になった者では困る、今はできなくてもそれを教育して一人前にするのがわれわれのるべきことなのだから、素質を見てゆくことが大切だと言われるのです。このような考え方で実施したのが今的方式の前提だったわけです。

——芸高も創立以来三十年になり、先には記念式典が行われましたか。先生は芸高に関係されていますか。

作る時には関係しましたが、できてからは関与していません。それは作る時の理想像と全く違つてしまつたからです。定員問題やらレッスン問題などでこのようにやつていると将来きっと禍根を残すことになると思い、ずいぶん声をかけられましたが、行きませんでした。案の定、今の芸高のあり方、進路などで苦労しているようです。特にピアノ科での定員はいろいろありますね。大学への入学の際、芸高の出身者が皆入るので外からの受験生の入学率が問題となっています。子供の頃からの一貫教育もいいことですが、社会的な面である問題がでています。この辺で一度考え直さねばならないのではないかと思います。

(昭和五十九年九月 本学内にて 聞き手 大石清)

金子 登(昭和五年入学 ピアノ)
入学したのが昭和五年、ピアノ科でした。入学試験はやはり三月

の中頃だったでしようか、桜が咲いていましたね。試験の発表はいつも夕方でしたから、夜桜を見ながら試験に通つたような記憶がありますよ。今と試験の種類も時期もあまり変わらなかつたようですが、ただ昭和五年当時は学生数も少なくてこぢんまりした学校でした。予科一年、本科三年で、予科を終了しないと本科には入れなかつたわけです。最初の一年は、音楽をやるのにふさわしいかどうかを見る試験期間でした。しかも予科の最初の三ヶ月は仮入学で、七月に試験があり、いいとなるとやつと本入学になるんです。仮入学の制度はそのあともかなり長く続いたようですね。僕らのころにも一年で辞めさせられた人がいましたね。しかし、なかには優秀な人もいましたから、どうして辞めさせられたのか不思議でした。

戦争中は寛永寺の前に防空壕ができて、そこへ楽譜を運ぶので大変でしたが、それ以前はあのへんは原っぱで、よく野球をしました。しかし野球といつてもすぐ木にひつかかる、するとホームランになる、そういう野球でした。おもしろいのは、美校と定期戦がありましたね、美校はちらとやりたいわけですよ。音校は女の子が多いですから。だけど音校の野球はダメでむこうの方が断然強くてこちらは本当はいやなんですが、ところがこちらでやるとどういうわけか音校が勝つんですねえ。

昭和三年に文部省督学官だった乗杉さんが校長になりましたが、文部省に顔が利いたせいか、予算を取るのがお上手でした。ただし細かいことにうるさいんです。廊下を歩いていて塵が落ちていると拾つて歩く人でした。ガラスが汚れていてもすぐに小使を呼んで掃除をさせるし。しかし乗杉さんの顔利きのおかげで、予算は取れ

る、校舎はきれいになるで、あの当時の学校でセントラル・ヒーティングがあつたのはあそこだけだったでしようね。スチームが奏楽堂の両側と廊下にずーっと通つていましてね。男の生徒で下宿している奴なんか自分のところよりあつたかいから、冬は学校へ早く来てスチームのところでたむろしているんですね。スチームも戦争でだいぶ放出してしまつたようだけれど、少なくとも僕らが入ったころ、学校はとてもきれいでしたよ。

学校にもいろんな名物がいました。谷中にヴァイオリンを弾く乞食がいて、それが学校にレッスンに来る。ある先輩の学生に習いに来てるんだ。彼は僕らよりだいぶ上だつたけど、だんだん落つてきて僕らの一年上になつていていたなあ。奏楽堂を降りていつた突き当たりが用務員室で、囲炉裏があつて、そう、当時の学生は囲炉裏を囲んでたむろして、そこでお弁当のめざしを焼いたりしてましたよ。その先輩は学校に來ても授業には出ないで、用務員室へ来るんです。それで、小使をつかまえては「おい、合唱をやろう」って言うんですね。でもヴァイオリンはうまかつたですよ。うまいんだけど、どういうわけか音楽会になるとダメなんだねえ。僕が卒業してからソリストに頼もうと思つたことがあるんだけど、練習が終わつていざ本番になるといいんだよ。で、どこに行つたんだろうと思つて搜すと、横浜の神奈川公会堂前の道にある焼鳥の屋台で飲んでいて、出てこない。「手がバラバラになつてしまつた」って言つたね。本当に変わった人で、いつでも浴衣で下駄履きでした。

今でも県庁の脇に横浜記念会館のホールがありますが、まだホールの少ない時期でしたから、向こうから一流の音楽家が来ると、必

ずそこが第一声でした。私が小学生だったとき、三浦環の帰朝リサイタルがあつて聴きに行きました。「あきらめらりよか、忘らりよか」っていう歌を歌つたんです。その歌い出しのアの発音がたいへんきれいなのに感心しました。あれは一生忘れないよ。しかしあのころの音校、美校は世間から一日置かれていたから、山下で学生が騒いだときにも「美校の学生です」と言つたら許されたという話もある。今よりも美校と音校が仲がよかつたね。大学になつて両学部一緒になつたけれども、学生どうしはかえつて遠ざかつたような気がするね。美校の学生のなかには音楽の好きな人が非常に多かつた。

学友会の主催する土曜演奏会というのがあつて、美校の連中も必ず来ていたね。あの演奏会は昭和の初めごろにはとても貴重な存在でしたよ。年二回、春と秋に盛大にやりました。まだ本格的とはいえないかつたけれども、オーケストラ自体は明治からあって、ユンケルさんがいたときには山田耕作が音頭をとつて「ウンケル親父のはげあたま」ってやつていたね。信時(潔)さんも悪くて、リノリウムの敷いてある床を泥の付いた靴を履いて踊つてリノリウムをすぐだめにしたらしい。

大正の終わりごろはクローン、そのあとラウトルップがいたね。そのラウトルップが帰る前に私が入つたんです。あの人はハイドンの大家で合唱がうまかつたよ。歌がうまいというか、ヴァイオリンのパートみたいな細かい音でも何でも歌つちやう人で、われわれ予科生にアの発音を細かく教えましたよ。外国语には何種類ものアがありますが、それを細かく分類して説明するんです。暗いアとか明

るいアとかね。そして合唱の各パートにクレツシェンドとディミヌエンドを書かせ、ちょっとでも書き写したものが長すぎたりするとすぐ消させる。合唱といつても当時は副科も一緒に三十人から百人程度でしたから、一人一人行き届きましたよ。私が最初に歌つたのはハイドンのオラトリオ『十字架上の七つの言葉』でした。私が入る前には『マカベウスのユダ』をやつて非常に成功してレコードもレングしたんだね。ヘンデル協会に送つて絶賛を浴びたそうですよ。僕らが入つた当時、最上級生の三年生に豪傑がいて、それが乘杉校長に「われわれは労力奉仕をしたんだからその金をよこせ」ってストライキをしました。学生運動のはしりですね。

当時の楽譜は全部輸入で、しかも合唱の楽譜はパート譜しかなく、それを厚紙に貼つて学生に貸すんです。その名残りはまだ図書館にあるでしょう。合唱が終わると楽譜を取り上げるんだけど、それでもなんとかして記念に取つておきたいという人もいて、ずいぶんなくなつたのもあるらしい。ああいうふうに学生に貸すというシステムは戦後なくなつたみたいだね。

当時のオーケストラの管は海軍の軍楽隊員がほとんどでした。なにしろわれわれが学生のところ管楽器をやる人なんていなかつたわけだから。しかし彼らは少し性格が違つていたね。築地に海軍の拠点があつてそこから樂器を持って上野まで行進して来るんです。ある時、ティンパニを叩いていた曹長が、いきなり立ち上がり大きな音で叩いて、「ちよつと待つてくれ。海軍だけ早く帰してくれ」って言つたんですね。練習は二時から四時ですから、どういうことかと思つたら晩飯が三時四十五分からで、練習を終わつて帰ると冷飯に

なつちやう。新兵が温かい飯を食つて自分たちが冷飯とはけしからんと、そういうことだつたらしいです。あれはどうやら軍艦の都合だつたらしいけれど、ずいぶんそういう時期は長かつたですよ。

今の人たちは技術的にはずいぶんうまくなつたけれども、当時の連中にはそれなりの持ち味があつた。つまり音によつて何かを表現しようという意欲があつた。今のほうが表現力はあるはずなんだが。

語学は今に比べれば劣つていたらうが、乙骨〔三郎〕先生のように英・独・仏話せて、いい音楽史の本を書いた立派な先生もいらつしやいました。それから島崎赤太郎つていう、理論関係を担当していらした先生は、僕らが入つたとき、教務主任でしたが、ある時「君、ドイツ語をやらなきやだめだぞ」つておつしやいましてね。それで「週に一度ドイツ語をやつたつて知れていますから、それよりは今までやつてきた英語をやりります」つて答えたら、「よく考えたまえ」つて一、三時間教務に置かれたことがあります。

ラウトルップのとき、アンティル・スリー、つまり二拍のばすときには三拍目までのばすということをさんざん言わされました。といふのも、われわれが入る前のころは、日本の音楽といふのは「大体そのへん」だつたんですね。大体二拍、大体一拍だつたからね。書いてある音符の時価を正確に弾くということをラウトルップは非常に正確に教えたわけですね。間違えると怒鳴りつけましたよ。次に来たプリングスハイムはあまり怒鳴らなかつたけれど、そしたら海軍の連中が「前の野郎は怒鳴るけれどもどこが悪いのか分からなかつた。今度の野郎は分かるけれども始末が悪い」つて言つてました

よ。マーラーでの当時気持ちが悪いと思ったのは、オーケストラのなかでクラリネットだけが駆け出すようなところがあつて、ラウトルップにきちつと教え込まれたあとではあつたし、なんだか具合の悪いものでした。あとでヴィーンに行つたときに分かつたことなんだけれども、それは、リズムとリズムの間には間隙があるということなんだよね。実際にもし非常に正確に動いていつてしまふと耳には駆け出したように聴こえる。拍と拍の間にちよつとした間隙を置くとちよつとよく聴こえるんですね。それを上手に使つたのがクロイツァーの演奏です。スピト・ピアノやスフォルツアンドが非常に効果的に決まるんです。ロイプナーさんが初めてN響の練習にて「君たちの演奏には縦線が聴こえる。縦線を取れ」としきりに言つたそうですが、音楽といふものは、縦線でまとまるものではなくて、流れているものが同じリズムで流れるから合うわけですね。だからフルトベングラーの演奏でチエロだけが駆け出して先へ行つて待つてているというようなところがありますが、それで聴いていてちつともおかしくないんですね。ピチカートが合うようになつたのはローゼンシュトックが来てからです。昭和の始め頃、つまりわれわれが入つた頃が音楽の一つの転換期だつたわけです。「大体」から「(きつちり)」への。そして絶対音感のことを言つたのがプリングスハイムです。園田高弘の親父が留学して、つくづく絶対音のないことを思い知らされたんですね。ソルフェージュの時間にみんないきなり歌い出すのに、自分がどこがドの音か分からなかつたと。彼はそれを子供の教育に生かして、科学的に子供が見て分かる大きさを研究して主婦の友社から本を出した。あれはなかなかいい本でし

たよ。それで教えるとかなり絶対音が出てくるようになつてゐるんです。ところが、机を叩いて何の音が入つてゐるかが分かつても、ちつとも音樂的ではないですね。それは犬の耳ですよ。それに実際に絶対音をもつてゐるとかえつて非音樂的な子が多い。音樂が縦割りになつてしまつて流れないんです。そりや便利ですよ。譜面を見て音が分かるんだから、暗譜もしやすいし。ただ、音が個々には分かるけれどもつながらないんです。歌を歌わせると嫌な音程で歌いますよ。「君、音程が違うよ」つて、ピアノをボーンと弾いたら合つていた。絶対音感のある子がモーツアルトの A-Dur のソナタを聴いて D-Dur だと言うので、「どうして」つて聞いたら「gisがないから」つて言うんだね。聞けば笑い話みたいだけど。

私が習つたヴィクトール・グレフという先生はその当時の一流の歌手を教えていた人ですが、彼は音程を教えるのにドレミファソを第一音、第二音と指を使つて教えるので非常に分かりやすいと評判でした。それからレヒナー、小学校の指導主事をしていましたが、彼女はわれわれが昔習つたような、ミとファ、シとドの間が半音という掛図みたいなものを考案出して「これは私が考案した」とつていきました。しかし教育というものは常に対象があつて決まるもので、ヨーロッパと日本ではもともと基盤が違いますから、ソルフェージュ教育ひとつとっても同じではありません。それだけ音が動いているわけですよ。

今になつていろいろ弊害が出てきているんですね。ピアノでは fis も ges も同じだが、管楽器でオーケストラに入つて吹いてみると H-Dur の fis と D-Dur の fis とは違うんだよ。押さえを変えないと音が合わない。それだけ音が動いているわけですね。

かつてフルートの吉田雅夫が教授会で「管楽器の学生には三、四年にはピアノを課さないでくれ」つて発言したんです。で、どうしてかと「耳が悪くなるから」。そしたら安川さんが立つて「それじゃ私どもは耳が悪いんでございましょうか」つて。しかし吉田先生の発言の真意を理解した人がどれだけいたか、特に絶対病患者のピアノ科にはいなかつたでしょうね。でも今いるあのピュイグ・ロジェは絶対病患者ではないと思うよ。

戦時中、ユダヤ人が強制的に帰されたり、外国人がいけないということになつて、それでわれわれが棒を振る機会が出てきたわけです。僕は昭和二十年の四月に助教授になりましたから、まだ戦争は終わつていなかつたんです。学校のピアノを疎開するということがありました。奏楽堂の二階にスタインウェイのピアノが二台あつてそれを下に降ろさなくちゃいけなかつたんですが、ところがその当時戦争中で学校に人夫が一人もいなくて、どうしようかっていうことになつたんですよ。学校にいたのはいわゆる役付きの先生だけでした。文部省に申請しようとしたけれど、その謝礼があんまり安いんで困つて、乗杉さんの疎開先へ相談しに行つたんです。そうしたらあの方もそういう交渉が得意ですから、「何ばかなことをしているんだ。人夫を十人雇つたにして二人雇えばいいじゃないか。そうすればたくさん金が払えるじゃないか。そういうことは会計が知つてははずだ」つて怒鳴られましたよ。

戦争が激しくなつてからは邦楽の先生が一人、洋楽の先生が二人、必ず宿直することになつてゐた。僕は空襲が激しかつたころはまだ非常勤だつたけれど、それでも宿直室に入れられて。あれもまたよ。

た楽しいこともありましたよ。邦楽の先生は全国にお弟子さんがいるでしょう、その人たちがいろんな物資を運んでくるわけ。めつたにない砂糖だつてちゃんとあるし、米もお菓子もありましたよ。

邦楽科は戦後一時なくなつたけれど、あのとき小宮〔豊隆〕さんは「邦楽科の家元制度は大学には馴染まない」と主張したんだよね。たしかにそうかもしれない。あの当時、宮城〔道雄〕さんが学校に見えるでしょ。そうすると、学生がみんなで門までお出迎えに行くわけ。帰りも。しかも学校を卒業しても食えない。なぜかといふと学校を出ても、内弟子にならなければ名前が貰えないからなんです。それじゃ大学に邦楽科を置いても無駄じやないかということになるわけです。さんざん揉めて、小宮さんも参議院に呼ばれて行きました。そのときの小宮さんの言葉が傑作なの。「日本は不幸な国である。左へ行けば行くほどインテリだ」と。ああいどさくさだつたけど、校長とも話ができるいい時代だつた。

昔は音楽家になろうと思つた動機を聴いてみると、『ウイリアム・テル』を聴いて感激したからとか、いろいろ必ずはつきりした動機があるわけね。ところが今はそういう感激したもののもつてないんだよ。僕が指揮科にいたころ、ある学生が「子供のころからなんとなくクラリネットを習つて、なんとなく附属を受けたら入つて、今度はなんとなく大学を受けたらまた入つて、今度なんとなく卒業するんだけど、これからどうしたらいいんだか分からぬ」と言つて言うんだね。悩むことはいいと思うけど、要するに感激する心が少ないんじやないかね。

まだ畠中〔良輔〕君がいたころ、ウイーン・フィルがアツバードと

来て、アンコールで『ロザムンデ』をやつたんです。始めから終わりますすごいピアニッシモで、これといつて速いところもないし、大きい音を出すわけでもないのに、心に迫るものがあつて、本当にすばらしい音楽でした。そして畠中君が、こういうすばらしい音楽をどうして音楽家の連中は聴きに来ないんだろうって言つてましたね。たしかに最近の学生たちは、自分のやつている専門以外の演奏会にはまずやつてこない。どこか音楽を取り違えているんじゃないでしょうか。

今の学生は本當によく技術面は勉強しますが、音楽の本質が何だろかということをもつと考える必要があるんじやないでしようか。声楽にしても昔とは比べものにならないほどよく声が出ていますよね。しかし音楽性はむしろ落ちてる。先生にしても昔の先生の音楽は、浅野〔千鶴子〕先生にしても、伊藤武雄にしても、それから長門〔美保〕にしてもすばらしかつたね。やはり何ものかをつかみ、表現しようとすると意欲が非常に強かつたと思う。当時、放課後になるとツイゴイネルワイゼンばかり弾いている奴がいて、スゴイネルワイゼンと呼ばれていたけれども、音程もナニもないのに、本当に迫力のあるものを弾いたよ。そういうとてつもない奴がいなくなつたよね。

(昭和六十一年五月 聞き手 遠藤雅古)

酒井 弘 (昭和十年入学 声楽)
——ご在学中から芸大になるまでを中心にお伺いしたいと思いま
す。ご入学は。

昭和十年でした。

——その頃の日本は戦前の一一番よい時期で、音楽学校としても最も充実していた時だったと思いますが。

そのとおりです、学校は充実して世の中は平和であり、学校挙げての地方演奏旅行も春秋に行われていました。ただ一つ忘れられないのは二・二六事件です。ちょうどその日は声楽の特別レッスンの日で、先生の自宅に伺うことになつており、大雪で困つております。たら伴奏の二宮〔正明〕先輩が車を用意して下さつたので伺うことができました。その途中六本木では銃剣付きの兵隊にストップを命じられ調べられましたので驚きましたが、一般市街は平常で帰宅して初めて重大事件であることを知りました。

——専門の先生はどなたでしたか。

ヴァーハー・ペニヒ先生でした。身体の大きな典型的なドイツ人で一〇秒遅れても懐中時計を高く差しあげてご気嫌が悪く、ふだんはお人好しの好々爺ですがレッスンになると Tenor の生徒は声が思うように出ないのでいつも「坊チャンなまけ者」とよくしぼられました。

芯から怒っているではありませんが、ある時はピアノの椅子を持ち上げて怒られたことや、本を床に投げられたこともあります。こちらも癪にさわり、本を捨てて出て行くと後から探し回られレッスンのやり直しをされたこともありました。また先生は学校中の気者で謝恩会の時など先生の挨拶の終わりには必ず「あながち」と言わるので生徒たちはおもしろがつて先生に当てました。忘れるることはできません。

——演奏会も盛んで当時のコーラスはすばらしかつたと記憶していますが。

コーラスは生徒数が少ないのですべて全校生徒でやりました。声楽が中心ですが、師範科、ピアノ、弦、管、作曲とオーケストラ要員を除きあらゆる科の生徒を動員しました。それでも二〇〇人足らずでした。オーケストラも管がいなかつたので海軍軍樂隊が手伝つてきたのですが、私のクラスに管楽器三名が入つてからその人たちを中心にだんだん副科の人たちでやるようになりました。副科といつても専門として飯の食える人がだいぶいましたからね。ファゴットは作曲の片山〔穎太郎〕先生でしたが、ピアノの金子〔登〕さんがそれに続き、さらに声楽の柴田〔睦陸〕君や作曲の中田〔一次〕君と代々副の人でやつていきました。私もクラリネットをやらされましたが、まともには吹けませんでした。

——他に懐かしく思い出される方は?

そう、守衛さんたちがこわかつた。生徒の人数が少なかつたので皆覚えられてしまい、古い守衛さんなどはわれわれをどんどん叱つてくれましたものね。皆呼び捨てで呼ばれ、先生になつても頭が上がらなかつた。

——私などはまつたく頭が上がりませんでした。本科へ入った時に宣誓式というのがありましたか。

あつたね、奏楽堂で一人一人呼ばれて前に出てゆき、ステージ下にある巻紙に毛筆で自分の名前を書くあれね。見ると前の人との名前が皆ふるえて字になつていない、それで自分も書こうとすると筆を持つ手がふるえてどうしようもない。落ち着こうとすればするほど

ふるえて字だか絵だか分からぬものになってしまったことを覚えている。

—大きな思い出ですね。あの頃の卒業生に聞けば誰もがあれだけはよく覚えていました。音楽学校での授業はいかがでしたか。

専門優先でしたね。レッスンは週に二回あつたし、音楽科目が優先で学科は水曜とか土曜にまとまっていたように思う。今は反対で学科が先に組まれ、その間をぬつてレッスンをしているみたいですね。レッスン途中でも学科の授業だからと出てゆく学生がいるしかつたように覚えています。先生にはすぐ覚えられてしまうので往返などはできなかつたし、あまり欠席者が多いと不公平になるからと、本筋とは違う話をしたりして楽しい授業でした。

—戦時中の学校はどうだったのですか。

十六年の十二月に繰り上げ卒業が始まり男子は動員されて軍隊に行つてしまい、女子は勤労動員でほとんど授業はありませんでした。公園の芝生も防空用の陣地に変わり、音楽学校にも兵隊が常駐していました。奏楽堂・屋上に監視台が作られて、われわれもたびたび上がって周囲を見張つたものでした。教官も三人ずつ交代で宿直していました。動物園の前のところ、今の東京都美術館の横の通りには焼夷弾がたくさん落とされましたが、幸い不発でした。よくここまで来なかつたと今思うとゾツとします。

—他に学生生活の中での思い出話などありますか。

十月四日の開校記念日には猫の額ほどの運動場で運動会をやつて、そのあと本職の模擬店が出ました。奏楽堂では玄人はだしの劇

などあり一日楽しく過ごしたことなど思い出しますね。今の芸術祭のような、芸術祭か模擬店祭か分からぬようなウルサさはなく本当に楽しい一日でした。時代が変わつたんですね。

—今の学生とくらべてどうですか。

今の学生は単位制のせいか、無難に単位をとれれば、というようなところがありますが、あの頃の学生はとにかく、ガムシャラにやつていたようなところがありました。まあ、時代が時代ですから、比べるわけにはいきませんが、おもしろい連中が多かつたね。

—私たちもそうでしたもの。復員学生というのは少々ぐれていますところもありました。戦争で勉強が遅れていたので、ハッタリばかりでした。ご迷惑をおかけしました。(笑)

あの頃の音楽学生というのは、無理解の世の中で勉強していたので、苦労していましたね。戦時に音楽をやることで世間からは冷たい目で見られ、親とはケンカしてくるし、何か逆らつているような面がありました。今はもう条件のよい中での勉強ですから、レヴエルはものすごく上つていますよ。

—私たちの頃は学年単位で授業を受けていたので、一クラス全部授業は一緒でした。だからクラスの中では声楽の人もピアノの人も弦、管、作曲と全部が友達です。先生方とのお付き合いもそのようで、専門外の先生だからといって話もしたことがないなんてことはありませんでしたね。

そう、われわれなどの生徒とも同じように付き合つていたから、皆、覚えていました。今でも昔の人たちのクラス会にはいつも呼ばれていています。

——そうですね。私たちも先生方の家で引っ越されると聞けば、クラス皆で出かけていつてお手伝いしたものです。

どの生徒とも親しみがあつたね。今は名前を覚えるのはよほどずば抜けた学生が担任の学生だけで、他の科の学生とはまったく付き合いはないからね。そういう意味では淋しくなりました。

——先生方の時代、それ以前の時代の方々から、私たちの時代までの人们は自分の意志どおりにはできず、いつもあの制限の中で過ごしてきました。戦後の人たちは本当に自由なことのやれる時代ですでの、その辺にいろいろと考え方の違いが出るよう思います。

いつも自分を押さえながら生きてきましたからね。戦後、しばらくは気持ちの切り替えがなかなかできませんでした。私たちは個人の力を伸ばすことで社会に貢献しようと努めましたが、今の人たちは他人の力を借りて自分を伸ばそうとする傾向があるような気がします。

——以前はよい意味での個人主義を作ってきたのですが、現在では民主主義ということでおい個人が生かされないような状態になつているようにも思われます。

その辺りの考え方の違いが大きな違いでしょうね。これから芸術の人たちももつともよい意味での個人を完成させて、社会的に大きな力になつていただきたいと思います。また、私たちを含め先輩の方々も皆、東京音楽学校で勉強できたおかげで、今こうしていられるとありがたく思つている人たちが多いと思います。

(昭和五十九年八月 本学会議室にて。聞き手 大石清)

山本正人（昭和十年入学 初めてのトロンボーン専攻生）

僕が最初に受けたのは昭和九年でしたが、だいたい田舎には管楽器自体がなく、さっぱりわかりません。私的なことですが、両親は教師で、姉が昭和五年、兄が十一年にどちらも師範科を出ています。僕が音楽をやりたいと言うと、両親は「お前、チンドン屋にだけはなるな」って、もう投げていました。入学試験といいまして、まだ管楽器のための試験科目というものがなかつたので、みんなどこかと一緒にされてしまいます。コールユーブンゲンも聴音もピアノもありましたよ。それとトロンボーンとね。同学年の管は全部で三人、山本力さんと鈴木正三さんと僕。一つ下に一人、その下に中山〔富士雄〕とか北爪〔利世〕がいましたが人数が少なくてなかなかオーケストラまでいかなかつたね。入つても上の方にはピアノや声楽の人がドツといて、波風も強く並大抵のことではありませんでしたが、僕はご覧のとおりで、管打のため、管打のために押しまくつてきたわけです。

管楽器の専門家が皆無に等しい音楽学校でトロンボーンをご指導下さったのは、ピアノの萩原英一先生でした。萩原先生といえば職人にして頑強な偉いピアノの先生で、われわれが習うような先生ではありませんが、ドイツで最初にトロンボーンを勉強してこられた、本当の草分けだつたんです。当時の日本ではトロンボーンの第1人者です。でもピアノの大先生ですから楽器を吹いてなどくれませんし、音階が吹けないとドヤされて、もう全然レッスンなんてもんじやなかつた。あとはフルートに貫名美名彦先生がいらしたくらい。それから高折〔宮次〕先生がティンパニを教えていらしたとか



昭和12年7月、軍事教練・分列行進（富士裾野）

ね。皆ピアノの先生です。だからわれわれなんかトロンボーンというより音楽を習つた感じでしたよ。トランペットの中山君なんか小林安八さんていう海軍軍楽隊の人に習つたんですから。専門の先生なしで勉強したっていうことが今といちばん違うんじゃないですかね。逆に今の子は先生に恵まれ過ぎて勉強しません。優秀な先生がすぐ模範演奏をしてくれるから、「ああやればいいんだ」って思うだけで練習しないんです。週一回一時間のレッスンでし

た。

ピアノの永田〔晴〕先生はホルンを吹いていました。作曲の大御所片山〔穎太郎〕先生、金子〔登〕先生、それに田村〔宏〕先生もファゴットを吹いていましたね。伊達純はティンパニを叩いていました。研究科や聴講科の連中は金を払つて副科をとつたんですよ。今は自由に勉強できてタダなのにやらない。昔は金管の人間は木管もやれば、弦もやつた。僕はサックスと、ヴァイオリンをやりました。一年下にいたヴァイオリンの渡邊〔暁雄〕なんかに「トロさん、キイキイうるさくてしようがないからいいかげんにやめてくれ」と言つて言つてましたが、彼は彼でクラリネットのひどい音を出して、お互いに言い合つてましたよ。だから交流も深まるし、自分の専門以外からいろんな影響を受けて得るもののが大きいんですね。声楽家が歌ばかり歌えればいいつてものじや決してないですよ。コーラスも当時は全員でやりました。

僕は四年を終えるとそのまま非常勤で残つたわけですが、そのころは管楽器をやる人もいないので、乗杉〔嘉壽〕校長が管は必要だということで師範科全員に強制的に履修させ、それでどうにか三十人、四十人になりました。軍の命令どおり「撃ちてし止まむ」の精神でなんでもやつていたわけです。卒業しても女の子は大砲の玉の検査、玉を叩いてみて、これはいい玉だとかひびが入つてるとか判断します。男の子は暁部隊へ行きましてね、船に乗つて水中音波を聞き分ける仕事をします。音楽学校を出てもそうやって耳を活かした仕事を与えられて、奉公ですね。

戦時下的学校では、たとえば歌の城多又兵衛先生、作曲の下總

〔覺三〕先生、ピアノの福井〔直俊〕先生がお骨折りくださいました。

僕は十七年の暮に兵隊から帰りました。昭和十七年から二十年頃、よく空白と言われますが、決して空白ではなかつたんですね。その間、学徒動員があり、確かに学校としては空白でしたが、生徒も教官も滅私奉公という気持ちで、皆それぞれの立場で動いていたわけです。ですから私などには空白の意味がよけい大きく感じられるわけです。記録がないということは、空白どころか記録しようがないほどの重大事件があつたということですね。

戦後は立川の空軍バンドと一緒にやらせてもらつたこともあります。譜面も頼んで貰つたというより、むこうからくれたんです。むこうはアマチュア、こちらは曲がりなりにもプロですから、むこも喜んで一緒にやつたわけですね。

初めは大学制度に面食らいましたねえ。今ではあたりまえになりましたが、講座制も単位制もなんのことやらわかりませんでしたから。音楽学校を大学制度の枠に当てはめようとしてもうまくいかなくていろいろ問題がありました。昭和二十六年にはプラスの研究部を作りました。予算は付かないが自由に音楽を研究して運営していくというもので二十六年十月十七日に最初の演奏会もやりました。管弦楽部ではできなかつたことを積極的に始め、新しい曲を入れたりジャズなどレパートリーの拡大にもつとめました。時代とともにいろいろなことが変わっていきますが、大切なのは教官も学生も目的をもつて努力することでしょうね。

(昭和六十年三月 大学内にて。聞き手 山本文茂)

濱野政雄（昭和十三年甲種師範科入学）

師範の頃にお世話になつた鳥井忠五郎先生に声楽を習い、そのご紹介で福井〔直俊〕先生にピアノを教えていただきました。ピアノの試験ではハイドンのソナタを弾きました。歌は唱歌集の中から当日指定されるということでしたね。私など東京育ちで東京音楽学校の難しさも親戚などから聞かされていましたから、試験の準備はかなり慎重にした方で、コールユーブンゲンや小学唱歌などはすべて暗譜していました。それでも、折しも大雪となつた合格発表の日、奏楽堂の玄関に貼られた巻き紙に自分の名前を見つけたときの嬉しさはまた格別で、印象深いものでした。

乗杉先生はなかなかのやり手で有能な先生でした。ただ多少官僚的なところもありまして、式のときなどに着るご自分の金ピカの制服があり、この写真を学校のなかで売らせているんですから、今考えるとちょっと子供じみているような気がしますが……。しかしこの先生は、小さな学校ではありましたが、入学した生徒をただちに全部覚えてしまうのが得意で、入学して間もない頃に、廊下で会うと、「おい中山」とか声をお掛けになるんびっくりしました。校長っていうのは偉いもんだって、一種畏敬の念みたいなものを抱きました。校長室には全生徒の小さい写真があつていつでも見て覚えておられるというふうだつたようです。ともかく学校を立派にするうえで手柄のあつた方だと思います。

城多又兵衛先生、福井直俊先生、下總院一〔覺三〕先生に身近にご指導いただいた記憶があります。城多先生はイタリアで勉強された優しい柔らかい感じの先生でした。福井先生はそれに比べると大

変厳しくて、まごまごするとピアノの下を這つて歩かなきやならなかつたようなわけで、厳しいけれども、またそれだけに情のある指導をなさつた先生でした。歌とピアノのレッスンが週一度、一時間に二、三人でしたが、それだけ勉強するのはかなり大変で、追いかげられるようでした。それで四六時中音ばかり出していましたら、今もあるような話ですが、僕なんか無名の手紙を貰つたりしました。靴に水を入れられた友人もいました。騒音公害は今も昔も変わらないんですね。

オーケストラは専門の人だけでは足りず海軍の人が応援に来ていましたが、さらに副科の人たちも一緒にいた。私はフルートで入っていましたが、当時の下級生で今は指揮をやつている森〔正〕さん〔昭和十七年卒 フルート〕、あれが器用でね、私の隣にいましたが、私など最低限度必要なテーマだけを吹いてあとは指だけ動かしていよいよな状態でしたが、森君ときたらオーケストラに必要な音は何でも出すというぐあいでした。でも師範科の人間としては、そんなフルートでオーケストラの音の中に入れてもらえたんですから貴重な体験になりましたね。それと合唱もです。これは全生徒でやりましたからよかったです。時局ですから、ドイツ国歌を歌つたり。今でも口をついて出できますよ～ハイル・ヒットラー・ユーベントゥ～なんてね。学校 자체もドイツ系になつていきました。軍事教練が盛んで、山本トロさん〔前掲トロンボーン専攻の山本正人氏の愛称〕や森脇憲三君が中隊長あたりで、われわれは鉄砲を担ぐんです。年に一度軽井沢で野外練習がありました。渡邊暁雄さんも一緒でしたね。女子はその時間、薙刀をやつていたわけです。

当時、中学以上で共学という学校は他になく、教室も左半分が男、右半分は女ときつちり分けられていました。行き帰りも校長先生が二階からちゃんと見張つてらしてね。あのころ円タクが安くて、遅れそうになると、御徒町から学校まで乗つてくるというのがよくあつたんです。それで男女相乗りが見つかつたりすれば、明治時代ほどではないにしてもなかなか厳しかつたですよ。でも厳しければ厳しいほど、網の目を潜つてコミュニケーションが図られたということでしょうね。

(昭和六十一年三月 聞き手 山本文茂)

安川加壽子

日本に帰つたのは昭和十四年の暮れです。レオ・シロタ先生やクロイツァー先生が演奏会をしていらつしやいましたが、パリで演奏会に行つた時と日本に帰つてきてからでは、やはりようすが違いました。

向こうでは学生として聴きに行くだけでしたが、帰国後は自分が演奏会をするわけですから。

当時のビシー政府がドイツに協力的でドイツの音楽はよろしいといふことになつて、それでずいぶん助かりました。そうでなければ米英の音楽もすべて駄目、ユダヤ系の音楽も駄目で、たとえばメンデルスゾーンの二台ピアノの曲も弾けませんでした。戦時にはたとえば服装も派手なものはもちろんいつさい駄目。黒の長いスカートで、スーツのようなものを着て演奏活動を続けました。演奏会には国旗掲揚が付きもので、必ず国旗に最敬礼して始ま

るんです。いろいろなところに慰問演奏にも出かけました。工場や地方の舞台もありました。白いご飯をあまりいただからなかつた時代ですから、どんぶりに白いご飯が盛られて出てくるとそれだけで嬉しかつたですね。モーツアルト、ベートーヴェン、ショパンをおもに弾きましたが、皆さん一生懸命聴いて下さいました。他に娯楽もありませんし、音楽に飢えていらしたみたいな感じでしたね。

終戦の前年の十月くらいまでは演奏活動をしていましたけれど、結婚し子供がいたので、終戦の年の七月、最初の東京空襲があつた直後に軽井沢に疎開しました。ところが軽井沢には何も食べるものがなく、信州の父の兄弟のところに行きました。そこでは食べるこには困らなかつたので、結局親類たちが集まつてきました。

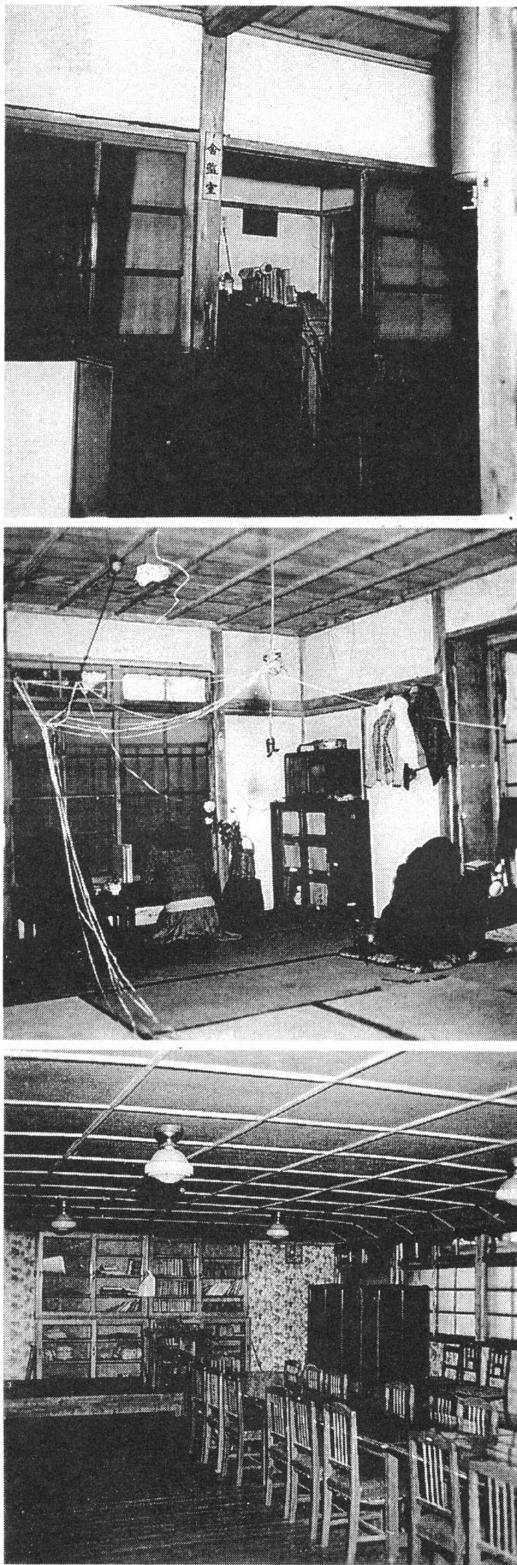
三月の空襲で東京を離れ、四月の空襲で家が焼けて、ピアノも樂

譜も全部焼いてしまいました。荷物を明日疎開先に出すという前の晩でした。

田舎にピアノもなく、小さい子にかかりつきりで、それこそ水汲みからすべてをしていましたが、終戦の年の一月頃でしたか、小学校でどうしても弾いてほしいと言われ演奏会を一回しました。しかしそのあとはなにしろ信州はすごい寒さで、何もできませんでした。終戦の明くる年の春ごろN響のローゼンシュトックさんと有馬さんが見えて、六月頃の定期に出ることになり、そのころからまた活動を再開することになつたんです。

そのあと小宮校長先生のとき、東京音楽学校から話があつて〔昭和二十一年の九月から教え始めました。

ピアノ科のおもな先生方はほとんどお辞めになつていてましたが、



(上)寄宿舍監室 (中)寄宿舍室内 (下)寄宿舍ホール (写真はいずれも昭和24年3月師範科卒武石とも子氏提供)

校舎は奏楽堂を中心にしていました。

あまり状態はよくなかったですが各教室にピアノがあり、ピアノが焼けなかつたのは幸いでした。終戦のどさくさに紛れて東京音楽学校と関係のない池内〔友次郎〕さんと野邊地〔勝久〕さん、巖本〔眞理〕さん、私なんかが入つたんです。

それまではほとんどドイツ系の教育ばかりで固まつていて、日本にはフランス音楽は通用しないみたいなこともいろいろ言われていました。でも二十四歳でとにかく若くて、学校について何も知らなかつたからよかつたのかかもしれません。

当時は教官室が男性用と女性用と分かれています、そこにはそれぞれ他の科の先生方もいらしたわけです。ですから教官室にはいるとお偉い先生方が揃つていらしたので、隅の方で小さくなつていてましたよ。

学校では、井口〔基成〕先生の生徒さんを半分いただいた格好でしたから、いい生徒さんに恵まれたんじやないかと思います。

井口先生は、最初は非常勤で八時間だけにしておきなさい、とおつしやるのでそのとおりにしたわけです。でも生徒さんも困つたんじゃないかと思いますが、私は日本語があんまりうまくなつたんですね。それに自分が教えられたのはフランス語でしたから、いざ日本語で何といえばいいのか、いろいろ言おうとしても適當な言葉が出てこなかつたり、とんちんかんな言葉になつたりして、どう表現するかということでだいぶとまどいましたね。

それから芸大になるときに先生方の資格審査があつたようです。私が、私は資格としては小学校卒業だけなんですよ。そのあとすぐパ

リのコンセルヴァトワールに行つてしまつたので、そのへんをどう格付けるかで、事務の方はだいぶとまどつたらしいです。なにしろ前例がなくどこにもはまらないわけですから。しかし自分では演奏会も相当やつっていましたから、そんな問題をどうこう思う暇もありませんでした。学生もとにかく相当意気込みがありましたよね。

私もそうでしたが昔の学生さんは、手書きで楽譜を写すわけですね。音符も一つずつていねいに見ましたよ。私がフランスの『シンフォニック・ヴァリエーション』を演奏したときも全部手書きでした。一台ピアノを両方とも手書きで書いてもらいました。

だから昔の学生さんが苦労してますよね、いろいろな点で。ただそれだけ自分でこの曲をどうしてもやりたいという意欲がもつとあつたと思うんです。この頃はあまりにも恵まれているから、わりとおざなりになつてしまふ時が多いと思いますね。

(平成元年二月二十八日 大学内にて。聞き手 大石清)

ハンス・E・プリングスハイム

——本日はお父様のクラウス先生の在日中のことについてお話を伺いたいと存じます。

父はマーラーの弟子であつたことから、毎年一曲ずつは交響曲をやつてゆきたいと考えていました。マーラーをやらない年はブルックナーやR・シュトラウスを取り上げていました。父が上野でやつたのは第二番、第三番、第五番、第六番、第七番の五曲でした。

——当時のプログラムを見ますと、マーラーではなくマーレル、ブルックナーをブルックネル、ワーグナーをワグネルというように書

かれていますが。

間違いではありません。

——シェーンベルヒなどは？

あれは一種の訛です。地方によってそのように発音するところがあります。

——音楽学校の先生をやめられたいきさつは。

これはね、ドイツ政府の方からナチス系の指揮者を入れるようとの依頼がきてそうなつたのです。

——それでどなたが来られたのですか。

ダンツィヒの指揮者だつた、ハンス・シュヴィガーが自分はナチではないけれど、早くドイツ国外に出たいということでドイツ政府に働きかけ、推薦をもらつて音楽学校に來たのです。ご存知と思いますが、彼はアメリカへ行くビザを待つていたので、ビザがおりた途端に学校をやめてアメリカに行つてしまつたのです。その時の理由は、音楽学校のレヴエルが低いということで、また父にもどつてほしいとの連絡があつたのですが、その時には父はもうタイへ行つたあとでした。それやこれやでドイツ政府は大慌てで次の指揮者をさがしフェルマーを推薦してきました。

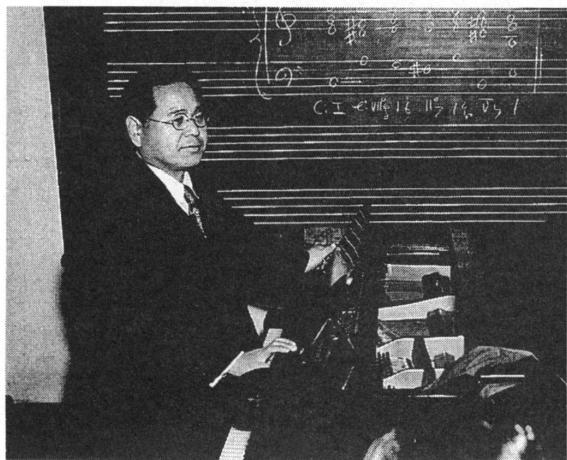
——彼のニックネームを知っていますか。名前をもじつて「フェルマータ」といっていました。

——フェルマーさんは戦後、軽井沢に抑留されていましたと伺いましたが。

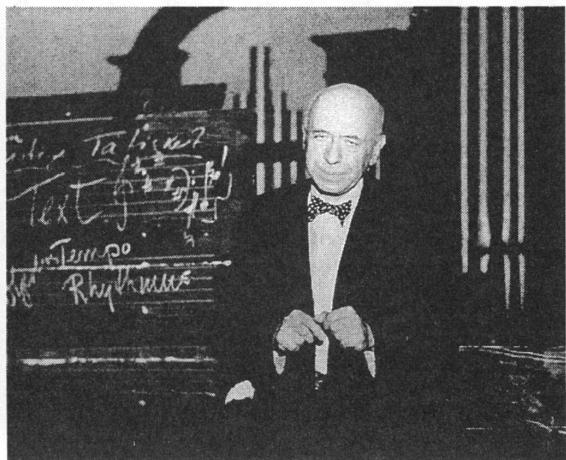
いや、それは違います。実は、日本の終戦の前にドイツが降伏したので、大使館関係の人は箱根に移されたのですが、一般の外国人

は皆軽井沢に疎開していたのです。フェルマーも同じで、そのまま残つてしまつたのでそのように伝えられたのでしょうか。私たちも家族は軽井沢に疎開させていたのですが、私と父は東京に残つていました。終戦になつてからドイツ人でもナチ以外の人はきびしくはされませんでした。L・クロイツァーはユダヤ系の人だつたし、私たちちはトーマス・マンの親戚ということでよくしてもらいました。私の弟だけはスペイ容疑でつかまり苦労しましたがね。戦後は通訳などやつっていましたが、今は元気にやつっています。話は前にもどりましたが、音楽学校をやめた時におもしろい話があるのです。やめたらすぐに日本を出ないと旅費が支給されないとということで、一度、東京から多勢の見送りを受けて汽車に乗つて出まして、横浜まで行つてまたもどつてきたのです。当時はすぐ出国しろ、といつても船で行くので期日的にうまく合わないのです。それで形式的にそのような方法をとつたわけです。それからしばらく船が出るまで宝塚の友人のところで待つていて、やつと船が出るというその前の日にアメリカから書類が來たのですが、もう間に合いません。それで十二年十月にタイへ出発しました。タイへ行つても将来に対する望みもなかつたので十四年の五月に日本へもどつてきて十五年から日本劇場の映画の間でのオーケストラ演奏の指揮をやつしていました。その頃鈴木鎮一さんの弦楽グループを母体にして東京室内管弦楽団を組織して、第一回の演奏会をしたのが第二次大戦の始まつた頃だつたと思います。戦争中一度火災にあいましてね、全部焼いてしまつたのですが、幸いなことに大事な楽譜や作品などは銀行の金庫に預けてあつたので助かりました。戦後は今の東京宝塚劇場、あの時はアーチ

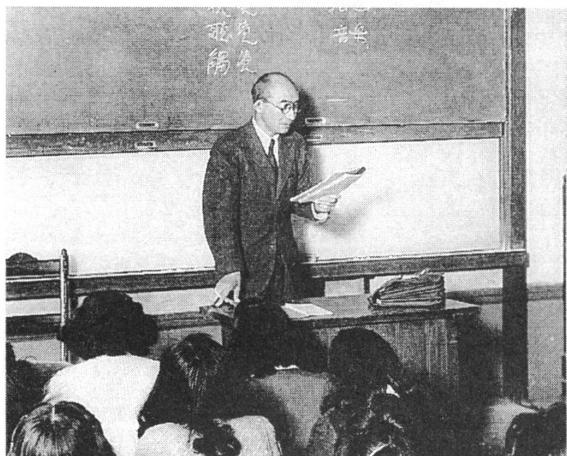
戦後の授業風景より



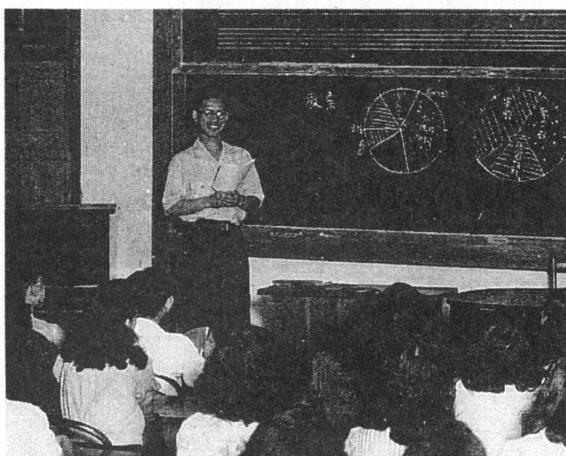
下總覺三



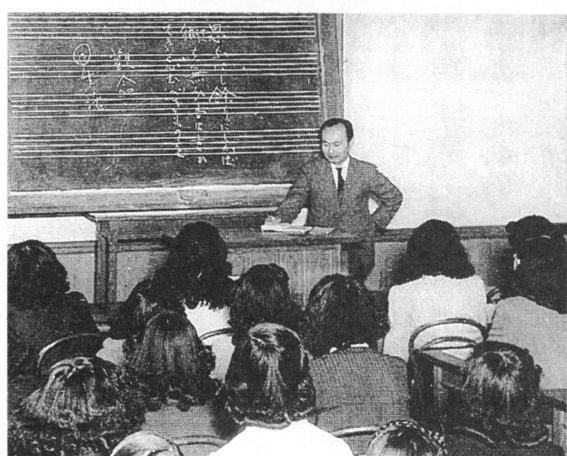
L. クロイツァー



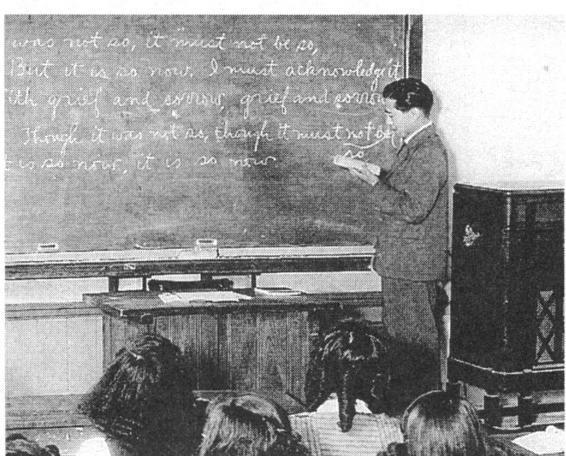
美学 加藤成之



教授法 真篠 將



国語 五味保義



英語 星谷剛一

(写真はいずれも昭和24年3月師範科卒 武石とも子氏提供)

ニーパイル劇場といつていたのですが、そこの音楽監督になりましたね、日本で一度もやられていなかつたオペラ「ミカド」をやることになつたのですが、楽譜がなくピアノスコアだけだつたので父がオーケストレーションしてやりました。

——ところでハンスさんはいつ日本にこられたのですか。

昭和八年十二月、十八歳の時でした。ちょうど、銀座の通りで地下鉄工事をやつていて大変だつたことを覚えてています。

私がきた時にちょうど、上野で父の指揮でのマーラーの第六番を聴きましたが、その時に亡くなつた豊増昇さんが鐘を受け持つていました。マーラー指揮の初演の時には父がやつていたので特に強く印象に残つています。父がこちらへくる前にもう一つエピソードがあるのですが、父は当時、ベルリンの市立オペラで総監督になることが予定されていました。当時のベルリンでオペラの職を得るためには、与党・社会党の推薦が必要でした。なかなか決定が通知されないので社会党の幹部のところへ電話をしたが、女人人が出て話がよく通らず、つい大きな声で怒鳴り喧嘩をしてしまつたそうです。

当人を呼び出して「あなたのところの女中がよくない」といつたところ、「あれは私の妻だ」という返事。その一件でいつぱんにおろされてしまつたとのことです。じつはこれより一年ぐらい前に、友人のラウトルップから、そろそろ日本の仕事が終わるので、その後任に日本へこないかと誘いがあつたそうですが、市立オペラの話もあり彼はベルリンをはなれる気はないだらうということでそのままになつていたそうです。この事件が起つたのでラウトルップへ手紙を出し、日本の後任の話はどうだらうということで決まつたので

す。ちょうど島崎赤太郎先生がドイツに来られたので正式に契約したということです。

——プリングスハイム先生が日本にこられてマーラーやブルックナーの曲を初演された功績は大変に大きなものがあつたのですが、当時の反響はどうだつたのでしょうか。新聞の評などあまりよくなかったようですが。

それは大変にけなされましたね。理由はよくわかりませんが、たぶん、日本の指揮者との問題からかと思います。また、まだあの当時の日本ではマーラーやブルックナーの音楽が理解しきれなかつたということもあると思います。これは他の例ですが、シューマンのピアノ協奏曲で井口基成さんのソロで父が指揮した時に、シンコペーションのリズムを正しいやり方をしたら、オーケストラは普通のリズムでがんばつちゃつて、シンコペーションにならなかつたのです。それで批評の中では指揮者が間違つていてオーケストラが正しいと書かれていました。

批評というのは一方通行ですから、反論ができません。だからどうしてもその批評に従つた評価となつてしまします。しばらくはその方向できていました。また、父の書いたものの翻訳でも不十分だつたりして、ずいぶん誤解を受けたりしていましたが誤訳といわないまでも意訳だつたりするので、読み方によつては書いた意志と逆になつたりしたようです。あの頃の雑誌『音楽研究』に父を送る号というものが特集されましてね、いろいろ書いてくれました。「音楽学校を去るにあたつて」という文を父が書き、他の人が「送る言葉」というのを書いてくれました。

父が音楽学校にいた六年間は、いろいろな曲を初演したというだけではなく、それらの曲が重要な曲だったということで大変に有意義な六年間だったと思います。

（昭和五十九年十一月 外人記者クラブにて。聞き手 大石清）

福本 亘（学食「キャッスル」のおやじ）

——キャッスルからみた、東京音楽学校、東京芸術大学の一面をお話し頂きたいと思います。キャッスルの始まりはいつ頃からでしたか。

昭和十一年四月からです。今のあの豊^{ユタカ}が生まれた年ですからよく覚えてます。山本正人先生が一年生、柴田睦陸先生が二年生の頃だつたと思います。

私どもは丸ビルの中に「キャッスル」という名前のレストランをもつてまして、そこからそこの国会図書館^①の食堂に頼まれて料理を作りにきていたのです。丸ビルをもとにして共同印刷という会社や他に七、八ヵ所やつていたのです。図書館にいた頃、音楽学校にも食堂ができたから、ということできちんにきたのです。ですから私は直接経営にタッチせず、家内が中心になつてやっていました。当時の校長さんは乗松先生できびしい方でした。男女の関係がうるさかつた時代でしたので、食堂もまんなかについたてを置いて、男と女と席を分けていました。偉い先生方は奏楽堂の真下の室に、職員食堂を作つてご注文を頂いて運んだものです。校長を中心にして順に並んで先生方が食事をされていました。中に女の先生でこわい方がいらつしやつて、少しでも時間におくれたり、料理が冷めていたりしたら大きな声でしかられたりしました。山下佐平先生

という方がおられて、私どもをよく指導されていました。当時の生徒課長だつたと思います。今でいえば学生部長という立場の方でした。

「キャッスル」という名前のことですが、丸ビルに店を出す時にどんな名がよいかずいぶん迷つたものですが宮城に近いのでお城ということでキャッスルにし、音楽学校を開いた時にはそのまま「キャッスル」になりました。共同印刷の他には時事新報社、オリンピック、不二アイスなど、いずれもアメリカで修業したコックをおいて腕にヨリをかけて料理を出していました。

——音楽学校でのメニューはどんなものでしたか。

コックが二名いてほとんど注文で作つていました。生徒さんたちはカツレツ、カレー、ハヤシ、コロッケなどがおもでしたが、先生方にはその日のご注文でお出ししていましたし、その日の体調に合わせてお作りすることもありました。結構、上等なものもやつていましたよ。先生の中にはご自分で調理場に来られて、料理された方もいらっしゃいました。ステーキだの魚のフライだのいろいろご注文があり、また、味にもうるさい方がおられました。なにしろ生徒数が少なかつたので作つておいておくことが少なく、クラス授業の多い日は作つておくのですが、レツスンの多い日はあまり生徒さんたちがこないのでつぱら注文だけでした。また、売店がなかつたのでレジのところで雑誌やらお菓子、靴下、化粧品などまで売っていました。今の大閑商店を兼ねていたようでした。

私は朝、丸ビルへ行く前に寄り、向こうが終わつてから帰りに寄るというようで、すべては室内にまかせつくりでした。でも、夜い

いろいろ話をしてくれたので、私も音楽学校の中はすべて知りつくすほどの知識をもつことができました。家内が身体の調子をくずしてから私がおもにやるようになり、家内が亡くなつてからは豊にまかせるようにしました。もう今年で七年になります。

—— そうですね、私などは戦前から戦中、戦後と長いお付き合いでした。おばさんに聞けば何ごともわかつたし、情報の源でした。昔はキャッスルの外に立派な藤の木があり、時期になるとすばらしい房の花が咲いて本当にきれいだった。あの藤棚の下でよく将棋などをつていましたね。

私も少々腕があつたもので、学校へ寄つた時などはよく生徒さんや先生と差したものでした。でも井上武雄先生にはどうしても勝てませんでした。校庭ではテニスもよくやつておられ、ピアノの水谷〔達雄〕先生にもお相手させてもらつたり、あの頃は食堂のおやじというよりお仲間のようにして頂きよい思い出を作らせて頂きました。皆さんとは家族的なお付き合いでした。お金がない時などはツ

ケでやっていましたし、皆さんもよく甘えて下さつてよい時代でした。

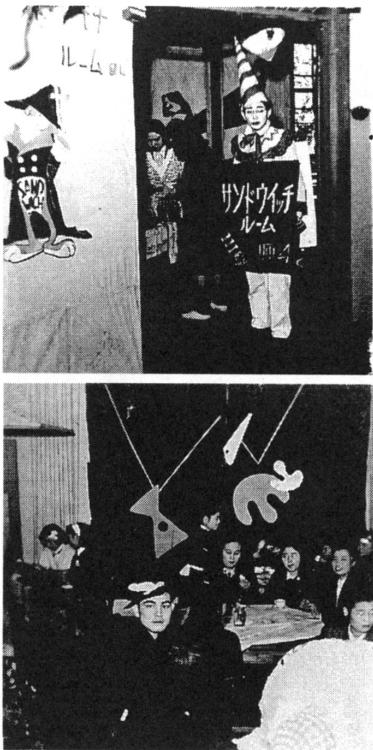
—— 私などはツケを残したまま兵隊へ行つてしまい、終戦になつてから払いに行つたら価値が違つていたのでおばさんにおこられた記憶があります。

そういう方も結構いらしてね、それぞれ戦後になつて仕事をされつからドカンとお払い下さつて恐縮しました。柴田先生は仕事でもうつた袋のままもつてこられたり、黛〔敏郎〕先生は留学される時に丸ビルの方にこられ、「今までの分です」といつてお払い下さつたり、皆さん本当によくして下さいました。

—— 戦中はどうされましたか、材料がなくて困つたでしよう。十八年頃におイモを食べた思い出がありますが。

何とかツテがあつてお米が手に入つたギリギリまでは、米のご飯を出せましたが、最後にはお芋が主体となり、はじめの頃はふかし芋でしたが、その内に芋粥となりました。ソテツの実を粉にしてパンを作りましたが、これは評判がよかつたですよ。二十年三月十日の東京大空襲を機にキャッスルも閉めることになり、子供たちは信州に強制疎開で行つてしまい、私どもは熊本の方へ行きました。終戦になつたらすぐ戻つてきて八月末にはもう再開しました。

—— そういえばわれわれが八月に復員して学校へ行つたらもうおじさんやおばさんが元気でやつていたのでホッとしたこと思い出します。戦後、丸ビルの方はどうなりましたか。たしか米軍に接収されたのではないかでしょか。



23年秋、芸術祭の模擬店

丸ビルの方は急に世の中が変わり三十年頃には手を引いて芸大だけになりました。昔のようなつもりで始めたのですが、大学になつてからは学生さんの数も増え、食べることも日増しに自由さをとり戻し、昔の考え方が通用しなくなり、ついに豊に全部まかせることにしたのです。材料費も上がり、人件費も大変となり経営がむずかしくなりました。その上、学生さんの方から値上げはしてくれるな、という希望があつたりでどうしようか悩んだ時代もありました。学校の食堂経営は常時同じ状態で計算ができないむずかしさがあるのです。春、夏、冬と休暇があるし、演奏会のある日、クラス授業の多い日、教育実習期間などには学生さんが多かつたり、少なかつたり、仕入れにも気を使わなければなりません。ちょっとしたことでの一日の売り上げがずいぶん違つてくるのです。今、うどんやそばもやつてているのですが、そのため湯を維持してゆかなければならぬのです。その電気代、ガス代は大変なもので、いつも熱湯を用意しておかねばならず、お客様の少ない時にも沸かしておかなければいけません。それで数を限つてしまふのです。時期的には中毒がこわいものですから、学生さんの状態をよく見て仕入れをするのです。私もここにキャッスルをはじめて、来年〔昭和六十一年〕でちょうど五十年になります。その間一度の事故もなく無事にここまでやつて来られました。そのためには、毎日、売り切れるように仕入れをしています。それで時には昼間の人が多くて計算外となつて、夕方に早く売り切れてしまいご迷惑をかけてしまこともあります。余分に仕入れると残つてしまい捨てるような無駄が出たり、次の日までに持ち越したりすると失敗することがあります。また、新

しいものでないと味の方も落ちますし、毎日朝に仕入れて一日をまかなっています。そのおかげで無事にすごせていました。一時、東台寮〔註：女子寮〕の跡に移つた時がありましたでしょう。あの頃が一番こわかった。ネズミは出るし、鳥がくるしで毎日の衛生面の注意が大変でした。この学生会館ができて、ホッとしました。これからもこの面では十分注意してゆきますし、従業員の皆さんにもよく言い聞かせてています。

——その点に関しては本当にありがとうございます。お客様の方はそのような裏の苦労についてはまったく知らず、当然のように思つて勝手なことを言って申し訳なく思つています。

当時は生徒さん方とは家族的な付き合いが多くて、私の娘もこの生徒さんと結婚しましたし、二十年くらい前には生徒さんの結婚に仲人を頼まれたこともありました。今でも地方の大学で先生をしておられる卒業生の方々が東京へ会議などで出て来られる就必须顔を出して下さいます。私どもの子供たちも皆さんに可愛がつていただいて、弟や妹のようなお付き合いをしていただき、今でも声をかけて下さいます。本当にありがたいことです。

——これから的学生さんもきっと、キャッスルの思い出をもつて世の中に出でゆき戻つてくることでしょう。これからもよろしくお願ひいたします。本日はいろいろなお話をありがとうございました。

（昭和六十年六月 キャッスルにて。聞き手 大石清）

(1) 現・国際子ども図書館（所在地：東京都台東区上野公園二二一四九）。明治十八年同地に東京図書館開館。その後、明治三十年帝国図書館、昭和二十二年十二月国立図書館、昭和二十四年四月から平成十年二月まで国立国会図書館支部上野図書館と名称を変えている。